

Dell™ Remote Console Switch
ソフトウェア・ユーザー・ガイド



注記



注:「注」は、コンピューターをよりよく使用するために役立つ重要な情報を意味します。

サード・パーティ・ソフトウェア。ユーザーは、Dellのサプライヤの許可を得て取得した付属マニュアルなどの印刷物や電子媒体(「サード・パーティ・ソフトウェア」)に示すとおり、ソフトウェア製品にDellのサプライヤの著作物であるソフトウェアを含んでいた、備えている場合があることを認めるものとします。かかるサード・パーティ・ソフトウェアを使用する場合は、ソフトウェア製品のインストール・ディレクトリにある「サード・パーティ・ライセンスReadMe」ファイルかそれに類するファイルに記載のマニュアルまたは媒体に定める適用される制限事項などの条件に従うものとします。

オープン・ソース・ソフトウェアはいずれも利便性を期待して配布されますが、現状のまま提供され、明示または黙示を問わず、いかなる保証もいたしません。この保証には、商品適格性や特定目的への適合性の黙示的保証を含みますが、これらに限定されるものではありません。事由の如何を問わず、損害発生原因の如何を問わず、かつ、責任の根拠が契約であるか厳格責任であるか(過失その他) 不法行為であるかを問わず、Dell、著作権保持者、協賛者は、損害が生じる可能性について報告を受けていたとしても、本ソフトウェアの使用から生じた直接的、間接的、偶発的、特別的、懲罰的または結果的損害のいずれに対しても一切責任を負いません(代替品またはサービスの提供、使用機会、データまたは利益の損失の補償、または、業務の中断に対する補償を含む)。

Dell Inc.の書面による許可のない複写は、いかなる形態においても 厳重に禁じられています。

本書で使用されている商標: Dell、DELL ロゴ、および OpenManage は、Dell Inc.の商標です。Intel Pentiumは、米国およびその他の国における Intel Corporationの登録商標です。Microsoft、Windows、および Windows Vista は、米国およびその他の国におけるMicrosoft Corporationの商標または登録商標です。Avocent は、米国およびその他の国におけるAvocent Corporationまたはその系列会社の登録商標です。Red Hat およびRed Hat Enterprise Linux は、米国およびその他の国におけるRed Hat, Inc. の登録商標です。SUSEは、米国およびその他の国でのNovell Inc.の登録商標です。VMwareは、米国およびその他の国におけるMware, Inc.の商標または登録商標(マーク)です。商標および名称の所有者またはその製品を参照するため、その他の商標および商号が本書で使用されていることがあります。これらの商標や商号は、一切Dell Inc.に所属するものではありません。

590-1022-510B

Remote Console Switch

2011年8月

目次

製品概要	7
特長とメリット.....	7
強力なカスタマイズ機能.....	8
Remote Console Switchの広範囲な管理機能.....	8
認証および承認.....	9
システム・コンポーネント.....	9
RCS Explorerウィンドウ.....	9
ビデオ・ビューア.....	10
Avocent® 製品との相互運用性.....	10
操作機能.....	11
ターゲット・デバイスの名前付け.....	11
ターゲット・デバイス名の表示.....	11
分類機能.....	12
IPv4およびIPv6のネットワーク・アドレス機能.....	12
インストール	15
ソフトウェアに同梱されているアイテム.....	15
サポートされているオペレーティング・システム.....	15
ハードウェア構成の要件.....	16
サポートされているブラウザ.....	17
JREの要件.....	17
ソフトウェアのインストール.....	17
ソフトウェアのアンインストール.....	18
ソフトウェアの起動.....	19
スイッチとターゲット・デバイスの構成.....	20
Webインターフェイスのインストールとセットアップ.....	22
基本のソフトウェア操作	25
Explorerでのシステムの表示.....	25
ウィンドウ表示のカスタマイズ.....	27
Remote Console Switch(DellまたはAvocent) の追加.....	28
Remote Console Switchのアクセス.....	37
VNCまたはRDPビューアの起動.....	39

サーバーとスイッチのプロパティの変更	39
一般プロパティ	39
サーバーのネットワーク・プロパティ	41
スイッチのネットワーク・プロパティ	42
情報プロパティ	43
サーバーの接続プロパティ	43
VNCプロパティ	44
RDPプロパティ	45
ブラウザ・ウィンドウを介したサーバーへのアクセス	47
サーバーとスイッチのオプションの変更	47
一般オプション	47
デフォルト・ブラウザ	48
DirectDrawサポートの変更(Windows OSのみ)	49
HTTP/HTTPSオプション	50
VNCオプション	50
RDPオプション	51
システムの編成	52
カスタム・フィールド名の変更	53
フォルダの作成	54
ユニットのサイト、ロケーション、またはフォルダへの割当	55
削除および名前の変更	56
Explorerウィンドウのカスタマイズ	57
スタートアップ時の指定表示の変更	58
デフォルト・ブラウザの変更	58
ローカル・データベースの管理	59
データベースの保存	59
データベースの読み込み	60
データベースのエクスポート	60
ビューアの使用法	63
RCSソフトウェアからのサーバーへのアクセス	63
閲覧中のサーバーとのインタラクション	65
ビューア・ウィンドウの機能	66
ビューアの調整	68
ビューアの解像度の調整	71
ビデオ画質の調整	72
リモート・ビデオ・セッションの変色抑制	75

画面の背景色表示の改善	76
マウス・スケーリングの設定	77
マウスの軌跡の最小化	77
マウスの性能の改善	78
マウス・カーソルのちらつきの抑制	78
スキャン・モードを使用した複数サーバーの表示	79
サーバーのスキャン	79
サムネイル・ビューのステータス・インジケータ	82
サムネイル・ビューアの操作	82
マクロを使用したキーストロークのサーバーへの送信	83
Session Options - Generalタブ	85
スクリーン・キャプチャー	86
セッション共有オプション	87
自動共有	87
エクスクルーシブ・モード	90
ステルス接続	92
プリエンプト・モード	93
バーチャル・メディア	96
共有およびプリエンプト操作	98
バーチャル・メディアの起動	98
バーチャル・メディア・ドライブのマッピング	99
バーチャル・メディアの接続ステータス	101
バーチャル・メディア・セッション	101
付録 A: RCSソフトウェアの更新	107
付録 B: キーボードとマウス	109
付録 C: TCPポート	113
付録 D: テクニカル・サポート	115

製品概要

Dell™ Remote Console Switch(RCS) ソフトウェアは、異なるプラットフォーム間で作動する管理アプリケーションで、スイッチおよび接続されているすべてのサーバーの表示および制御を行うことができます。異なるプラットフォーム間で作動する設計により、広く使用されているほとんどのオペレーティング・システムとハードウェアのプラットフォームとの互換性が確実にになります。RCSソフトウェアでは、スイッチ・ベース認証、データ転送およびユーザー名／パスワードの保管が安全に実施できます。各スイッチで認証とアクセス・コントロールが個別に取り扱われ、システム制御の分散が効果的に行われます。

RCSソフトウェアでは、直観的な分割画面インターフェイス形式のExplorer型ナビゲーション方式が使用されており、システム全体に対して単一ポイントからアクセスできる操作性が追加されています。ユーザーはここから、システム・サーバーに対して、既存のスイッチの管理、新規スイッチのインストール、ビデオ・セッションの起動などを行うことができます。またサーバー、サイト、フォルダ別などの組み込みのグループ分けにより、表示するユニットの選択が容易にできます。強力な検索・分類機能により、いずれのユニットの検索も簡素化します。

特長とメリット

RCSソフトウェアは、簡単にインストールと操作ができるよう設計されています。管理下にあるスイッチを自動検出する機能により、新しいユニットを数分でインストールすることができます。ウィザードベースのインストールとオンラインのヘルプにより、システムの初期設定が簡単に実施できるようになっています。直感的なグラフィックを利用したインターフェイスの導入により、スイッチの管理と更新は非常に簡単で分かりやすくなっています。

強力なカスタマイズ機能

RCSソフトウェアを調整して、システムの特定のニーズに合わせて行うことができます。デフォルトのグループを活用することも、またユーザー独自のグループを作成することもできます。ユニットやフィールドの名前、およびアイコンをカスタマイズして、ユーザーがより使いやすいように設定を変更できます。例えば、システム・ユニットは、ユーザーが識別しやすい名称を使用すれば短時間で容易に検索できます。

Remote Console Switchの広範囲な管理機能

RCSソフトウェアを使用すると、一つのシステム内に複数のスイッチを追加し、管理できるようになります。新しいスイッチをインストールすると、スイッチ・パラメーターの構成、ユーザー・ビデオ・セッションの制御、プリエンプトができるようになります。さらにスイッチの再起動やアップグレードなどのコントロール機能も実行できます。RCSソフトウェアは、Dell OpenManager™ IT Assistant Event Viewerに対応するように設計されているので、システム管理者はシステム・イベントの各レポートを統合することができます。簡易ネットワーク管理プロトコル(SNMP)トラップの有効化、ターゲット・デバイスの構成、ユーザー・データベースの管理が実行できます。

このソフトウェアを使用して、以下のDellスイッチを管理することができます。

- ・ 4322DS
- ・ 2162DS
- ・ 1082DS
- ・ 2161DS
- ・ 2321DS
- ・ 4161DS
- ・ 2161DS-2
- ・ 1081AD
- ・ 2161AD



注: Dell 1081ADと2161ADスイッチについては、RCSを介して追加／管理するスイッチ用にDellリモートアクセスキー(RAK)が必要です。

認証および承認

RCSソフトウェアを使用すると、複数のRemote Console Switchのアクセス権を、それぞれのRemote Console Switchで個別に管理するのではなく、単一のインターフェイスで管理できます。セキュリティと効率性を向上させるために、Lightweight Directory Access Protocol(LDAP)機能ではネットワーク全体の単一認証ソースからアクセス権を取得するため、個々のRemote Console Switchでアクセス権を更新する必要がありません。

Remote Console Switchでは、標準のActive DirectoryスキーマまたはDell Extended Schemaを使用して認証を行い、すべてのDellハードウェアとの互換性を最大限に保つことができます。



注: Dell 1081ADおよび2161ADスイッチはLDAPをサポートしません。

システム・コンポーネント

本ソフトウェアの主要コンポーネントは、以下のとおりです。

RCS Explorerウィンドウ

RCS Explorerウィンドウは、ソフトウェア機能にアクセスする際の主要な制御を行うウィンドウです。ローカル・データベースで定義されているスイッチやターゲット・デバイスは、Explorerウィンドウから参照できます。ユニットの一覧は、既定の分類カテゴリー(アプライアンス、デバイスなど)により異なる方法で表示できます。また新たな名称でフォルダを追加することによりカテゴリーをカスタマイズすることもできます。ユニットにカスタム・フィールドを指定して他のカテゴリーを使用することもできます。

Explorerのデバイス・リストでは、ターゲット・デバイス・リストからデバイスを選んで、このデバイスとのKVMセッションを起動することができます。キーボード／ビデオ／マウス(KVM)セッションを起動すると、ビデオ・ビューアが開きます。Explorerのアプライアンス・リストでは、構成したいスイッチを選択できます。

ビデオ・ビューア

ユーザーはこのビデオ・ビューアからターゲット・デバイスへのアクセスや管理を行います。事前に定義されたマクロの中から、ビデオ・ビューアのマクロ・メニューに表示するマクロ・グループを選択できます。Remote Console Switchでは、ビデオ・ビューアを開いてターゲット・デバイスに接続できます。詳細については、「ビューアの使用方法」(ページ63)を参照してください。

また、ビデオ・ビューアからはバーチャル・メディア・ウィンドウにもアクセスできます。バーチャル・メディア・ウィンドウでは、物理ドライブ(ディスク、CD-ROM、DVD-ROMのデータ・ドライブなど)をターゲット・デバイスにマッピングできます。これによって、メディア・デバイスが直接ターゲット・デバイスに接続されていない場合でもデバイスを使用できるようになります。バーチャル・メディア・ウィンドウに関する詳細については、「ビューアの使用方法」(ページ63)を参照してください。

Avocent® 製品との相互運用性

RCSソフトウェアを使用して一部のアボセント製スイッチにアクセスできます。また、これらのアボセント製スイッチを管理できるので、システムの管理での柔軟性を高めることもできます。

さらに、RCSソフトウェアはAvocent IQモジュールもサポートしているため、より多くのサーバー・タイプをアクセス、管理できます。Avocent IQモジュールのサポートが追加されたことにより、次の接続がサポートされるようになりました。

- ・ PS/2モジュール(Dell/Avocentモジュール経由)
- ・ バーチャル・メディア および スマート・カード/ Common Access Card(CAC) バージョンなどのUSBモジュール(Dell/Avocentモジュール経由)
- ・ VT100シリアル・モジュール(Avocentモジュール経由)
- ・ Trueシリアル・モジュール(Dell/Avocentモジュール経由)
- ・ Sunモジュール(Avocentモジュール経由)
- ・ PS2Mモジュール(Avocentモジュール経由)



注: Dell SIPモジュールは、直接接続されているアボセント製スイッチでサポートされています。



注: Dell 1081ADおよび2161ADスイッチはTrueシリアル・モジュールをサポートしません。

操作機能

RCSソフトウェア機能には、ターゲット・デバイスの名前付け、ターゲット・デバイス名の表示、並び替え、およびIPv4とIPv6ネットワーク・アドレス機能が含まれます。「キーボードとマウス」(ページ109) にExplorerの操作で使用するショートカットが一覧されています。他のコンポーネントも、マウス操作に加えてキーボードのフル操作に対応しています。

ターゲット・デバイスの名前付け

このソフトウェアでは、各スイッチとターゲット・デバイスで固有の名前が必要となっています。データベース内の既存の名前と競合する名称に対しては、ソフトウェアは次の手順で固有の名前を生成し、ユーザーの介入を最小限に抑えます。

バックグラウンド処理(名前や接続の追加・変更などの自動処理) 中に競合する名前が検出された場合、競合する名称は自動的に固有の名前に変更されます。これは、ティルデ(^)の後に任意の数字を加えることで行われます。数字は、ティルデを追加しただけでは名前を固有化できない場合に追加されます。この場合、数字は1の値から始まり、名前が固有のものになるまで増分されます。

操作中に固有ではない名前を指定すると、固有の名前を指定するよう求めるメッセージが該当のユーザーに表示されます。

ターゲット・デバイス名の表示

スイッチが追加されると、このスイッチから取得したターゲット・デバイス名はソフトウェアのデータベースに保存されます。その後、ユーザーはExplorerでターゲット・デバイス名を変更できます。新しい名はデータベースに保存され、様々なコンポーネント画面で使用されます。ターゲット・デバイスの新しい名は、スイッチには送信されません。

このソフトウェアは分散処理型の管理システムとなっているため、スイッチ上のターゲット・デバイスに割り当てられた名前は、ソフトウェアのデータベースを更新

する必要なしにいつでも変更できます。管理下のターゲット・デバイスのリストは、ユーザーごとにカスタマイズして表示することができます。

単一のターゲット・デバイスに対して複数の名前を関連付けるため(スイッチ上ではある名称、ソフトウェア内で別の名称、のように)、ソフトウェアでは以下の規則に従ってどの名前を用いるかが判断されます。

- ・ Explorerは、自己のデータベース内のターゲット・デバイスのみを、このデータベース内にある名前で一覧表示します。すなわち、ターゲット・デバイスの情報を得るためにExplorerがスイッチにクエリを送ることはありません。
- ・ 再同期化ウィザードは、スイッチのターゲット・デバイス名がデフォルト名から変更された場合にのみ、ローカルで指定したターゲット・デバイス名を上書きします。再同期化中にスイッチから読み込まれたターゲット・デバイスの非デフォルト名は、ローカルで指定した名前に優先します。


分類機能

ソフトウェア・コンポーネントの一部の表示形態では、各アイテムに関する情報が複数のコラムに示されるアイテムのリストが表示されます。コラム・ヘッダーに矢印がついている場合、このリストを表示する際は、コラムを昇順または降順に分類して表示できます。

コラム・ヘッダーごとに表示を分類するには、コラム・ヘッダーの矢印をクリックします。リスト内のアイテムはこのコラムに従って分類されます。上向き矢印は、リストがこのコラム・ヘッダーで昇順に配列されていることを示します。下向き矢印は、リストがこのコラム・ヘッダーで降順に配列されていることを示します。

IPv4およびIPv6のネットワーク・アドレス機能


RCSソフトウェアは、現在サポートされているインターネット・プロトコル・バージョンであるIPv4(デフォルト)またはIPv6のいずれか、またはIPv4モードとIPv6モードの両方を同時に使用するシステムにも対応しています。

 **注:** Dell 1081AD および 2161AD スイッチは、IPv4とIPv6モードの同時使用には対応していません。

IPv4モードの接続は、ステートフル(設定とIPアドレスをサーバーから取得する)あるいはステートレス(スイッチは通常、IPアドレスとルーター・アドレスをルーターか

ら動的に取得する)の自動設定のいずれかです。IPv4モードの場合、スイッチのファームウェア・アップグレードと緊急起動ファームウェア・アップグレードは、TFTPサーバーとFTPサーバーの両方でサポートされます。

IPv6モードはステートレスの自動設定接続です。IPv6モードの場合、スイッチのファームウェア・アップグレードはFTPモードのみで対応しており、緊急起動ファームウェアのフラッシュ・ダウンロードは実行できません。フラッシュ・ダウンロードを行うには、TFTPサーバーを介して一時的にIPv4ネットワークに接続する必要があります。

 **注:** Dell 1081ADおよび2161ADスイッチでは、IPv6モードはステートフル接続です。

インストール

RCSソフトウェアをクライアント・コンピューターにインストールする前に、必要なアイテムがすべて揃っていること、およびターゲット・デバイスとRCSクライアント・コンピューターで作動しているオペレーティング・システム、ブラウザ、Java Runtime Environmentがサポート対象のものであることを確認してください。

ソフトウェアに同梱されているアイテム

このソフトウェアは、アプライアンスのRemote Console SwitchソフトウェアCDに収録されています。ユーザー用のマニュアルは、Remote ConsoleソフトウェアのExplorerウィンドウのヘルプ・メニューから、オプションとしてアクセスできます。

サポートされているオペレーティング・システム

RCSを稼働しているクライアント・コンピューターでは、次のいずれかのオペレーティング・システム・バージョンを使用している必要があります。

- ・ Microsoft® Windows® 2003 Server、Service Pack 3 Web、Standard、およびEnterprise
- ・ Microsoft Windows Server® 2008 Web、Standard、およびEnterprise
- ・ Microsoft Windows XP Professional(Service Pack 3)
- ・ Microsoft Windows Vista™ Business(Service Pack 1)
- ・ Microsoft Windows 2000 Professional、Service Pack 4
- ・ Microsoft Windows 7 Home PremiumおよびProfessional
- ・ Red Hat® Enterprise Linux® 4.0および5.0 WS、ES、およびAS
- ・ SUSE® Linux Enterprise Server 10、およびServer 11

- ・ Ubuntu 8 ServerおよびWorkstation

ターゲット・デバイスでは次のいずれかのオペレーティング・システムを稼動している必要があります。

- ・ Microsoft Windows 2000 Server(32-bit) およびAdvanced Server
- ・ Microsoft Windows XP ProfessionalおよびStandard(Service Pack 3)
- ・ Microsoft Windows Server 2003 Web、Standard、およびEnterprise
- ・ Microsoft Windows Server 2008 Web、Standard、およびEnterprise
- ・ Microsoft Windows Vista Standard、Business(Service Pack 1)、およびEnterprise
- ・ Microsoft Windows 7 Home PremiumおよびProfessional
- ・ Netware 6.5(32ビット)
- ・ Red Hat Enterprise Linux 4.0および5.0(WS、ES、およびAS)
- ・ Solaris Sparc 10(64ビット)
- ・ SUSE Linux Enterprise Server 10およびServer 11
- ・ Ubuntu 8 ServerおよびWorkstation
- ・ VMWare® ESX 3およびESX 4(32-bit)

ハードウェア構成の要件

本ソフトウェアのシステム・ハードウェア構成の最小要件は以下のとおりです：

- ・ 500 MHz Intel® Pentium® III
- ・ RAM 256 MB以上
- ・ 10または100BaseT NIC(100推奨)
- ・ グラフィック・アクセラレーター付きXGA Video
- ・ デスクトップ解像度が少なくとも800 x 600であること
- ・ カラーパレットが少なくとも65,536色(16ビット) であること

サポートされているブラウザ

Webインターフェイスへのアクセスに使用するコンピューター、およびこのソフトウェアを実行するクライアント・コンピューターには、次のいずれかのブラウザがインストールされている必要があります。

- ・ Microsoft Internet Explorer バージョン 6.x SP1 以降
- ・ Firefox バージョン2.0以降

JREの要件

このソフトウェアを実行しているクライアント・コンピューターを使用してターゲット・デバイスにアクセスするコンピューターには、Java Runtime Environment (JRE) の1.6.0_11以降のバージョンがインストールされている必要があります。スイッチは、該当のコンピューターにJavaがインストールされているかどうかの検出を試みます。Javaがインストールされていない場合には、<http://www.java.com>からダウンロードし、JNLPファイルをJava WebStartと関連付けてください。

ソフトウェアのインストール

このソフトウェアは、Microsoft WindowsおよびLinuxのオペレーティング・システムにインストールできます。対象システムにRCSソフトウェアをインストールするには、次の手順に従います。

Microsoft Windowsシステムにインストールするには:

- 1 CD-ROMドライブにRCSソフトウェアのCD-ROMを挿入します。
- 2 デフォルト・ドライブをCD-ROMドライブの文字に設定し(「drive」をCD-ROMドライブ文字に置き換える)、次のコマンドを実行すると、インストール・プログラムを起動できます。

```
drive:\WIN32\SETUP.EXE.
```

- 3 画面上の手順に従ってください。

Linuxシステムにインストールするには:

- 1 CD-ROMドライブにRCSソフトウェアのCD-ROMを挿入します。

- 2 AutoMountがサポートされていて有効になっている場合は、手順3に進みます。

-または-

システムがAutoMountをサポートしていない場合は、

次のコマンドを実行し、CD-ROMの内容をマウントします：

```
mount -t iso9660 -ro mode=0555 <device> <mount point>
```

「device」を使用マシンでのCD-ROM名に置き換え、「mount point」を希望するマウント・ポイント名に置き換えます。例えば、/mnt上の第2 IDE装置であるCD-ROMにマウントする場合、次のコマンドを実行します：

```
mount -t iso9660 -ro mode=0555 /dev/hdb /mnt
```

- 3 コマンド・ラインで、作業ディレクトリをマウント・ポイントに変更するための次のコマンドを実行します：

```
cd /mnt
```

- 4 次のコマンドを実行し、プログラムのインストールを開始します：

```
sh ./linux/setup.bin
```

- 5 画面上の手順に従ってください。

ソフトウェアのアンインストール

Microsoft Windowsオペレーティング・システムで、このソフトウェアをアンインストールするには、コントロールパネルから以下の手順で行います：

- 1 コントロールパネルを開き、**プログラムの追加と削除**を選択します。現在インストールされているプログラムの一覧が表示されます。
- 2 RCSを選択します。
- 3 **変更と削除**ボタンをクリックします。アンインストール・ウィザードが開きます。
- 4 **アンインストール**ボタンをクリックし、画面上の手順に従います。

Microsoft Windowsオペレーティング・システムで、コマンド・ウィンドウからこのソフトウェアをアンインストールするには、以下の手順で行います：

- 1 コマンド・ウィンドウを開き、RCSのインストール時に使用したインストール・ディレクトリを指定します。Windows 32ビット・オペレーティング・システムでのデフォルト・パスは、プログラム・ファイル・ディレクトリです。
- 2 UninstallerDataサブディレクトリを指定し、次のコマンドを(クォーテーション・マークも含めて) 入力します:

```
"Uninstall IBM Virtual Console Software.exe"
```

アンインストール・ウィザードが開きます。画面上の手順に従ってください。

Linux稼動のシステムでこのソフトウェアをアンインストールするには、以下の手順で行います:

- 1 コマンド・ウィンドウを開き、RCSのインストール時に使用したインストール・ディレクトリを指定します。Linuxシステムでのデフォルト・パスは /usr/lib です。
- 2 UninstallerDataサブディレクトリを指定し、次のコマンドを入力します:

```
% sh ./Uninstall_Dell_Remote_Console_Software
```

アンインストール・ウィザードが開きます。画面上の手順に従ってください。

ソフトウェアの起動

Microsoft Windowsシステムでソフトウェアを起動するには:

スタート → プログラム → Dell RCS softwareを順に選択します。RCSソフトウェアが起動します。

LinuxでRCSソフトウェアを起動するには:

アプリケーション・フォルダ(デフォルトでは /usr/lib/Dell_Remote_Console_Switch_Software) から、次のコマンドを入力します。

```
./Dell_Remote_Console_Switch_Software  
-または-
```

/user/binから次のリンクを入力します。

```
./Dell_Remote_Console_Switch_Software  
-または-
```

本製品がデフォルト以外のディレクトリにインストールされている場合には、次のコマンドをシェルから実行します。

```
<パス>/Dell_Remote_Console_Switch_Software
```

-または-

インストール時にデスクトップにショートカットを作成してある場合は、ショートカットをダブルクリックします。

スイッチとターゲット・デバイスの構成

このセクションでは、スイッチとターゲット・デバイスへのユーザー・アクセスの構成手順の概要を説明します。スイッチに関する特定の情報については、スイッチの『インストール／ユーザー・ガイド』を参照してください。

スイッチを追加するには、以下の手順で行います：

- 1 ソフトウェアをクライアント・コンピューター（1台または複数台）にインストールします。
- 2 クライアント・コンピューターでソフトウェアを起動します。
- 3 必要に応じてExplorerからユニット・プロパティやオプションの設定、その他のカスタマイズを行います。
- 4 ローカルGUIインターフェイスを使用してすべてのターゲット・デバイスの名前を構成します。
- 5 管理対象となる各スイッチで、手順3から6を繰り返します。
- 6 ソフトウェアの環境設定が完了したら、**File** → **Database** → **Save**を順に選択し、ローカル・データベースのコピーをすべての設定内容とともに保存します。
- 7 2台目のコンピューターでソフトウェアを起動し、**ファイル** → **データベース** → **読み込み**を順に選択して先ほど保存したファイルまで移動します。ファイルを選択し、**Load**をクリックします。セットアップ対象のクライアント・コンピューターのすべてでこの手順を繰り返します。
- 8 スwitchに接続されているターゲット・デバイスにアクセスするには、Explorerでターゲット・デバイスを選択し、**Connect Video**または**Browse**ボタン（表示さ

れるのは選択されたターゲット・デバイスに対応するボタンのみです)をクリックして、セッションを開始します。

ユーザー・アカウントを構成するには、RCSソフトウェアを使用するか、またはRemote Console Switchに統合されているWebインターフェイスから行います。詳細については、『Dell Remote Console Switchインストール／ユーザー・ガイド』を参照してください。

Remote Console Switchを構成するには、以下の手順で行います：

- 1 付属のシリアル・ケーブルを使用して、端末あるいは端末エミュレーション・ソフトウェア稼動のPCをスイッチ背面パネルの設定ポートに接続します。この端末は、9600ボー、8ビット、1ストップ・ビット、パリティなし、フロー・コントロールなしに設定してください。
- 2 まず付属の電源コードをスイッチの背面に接続し、それから適切な電源コンセントに差し込みます。
- 3 電源スイッチを入れると、ユニット背面の電源表示ランプが30秒間点滅し、セルフテスト実行中であることを示します。メイン・メニューにアクセスするには、Enterキーを押してください。

Remote Console Switchハードウェアの環境設定：

- 1 Mainメニューが表示されます。メニューには11のオプションがあります。オプション1の**Network Configuration**を選択します。
- 2 オプション1を選択し、ネットワークの速度を設定します。速度を選択して設定すると、**Network Configuration Menu**に戻ります。
- 3 オプション2を選択し、**IP Configuration**メニューを開きます。
- 4 以下のIPアドレス・タイプのなかから対応する番号を1つ入力して選択します：1: **None**、2: **IPv4 Static**、3: **IPv4 Dynamic**、4: **IPv6 Static**、または5: **Pv6 Dynamic**。
- 5 **Terminal Applications**メニューからオプション3～5を順に選択し、Remote Console SwitchのIPアドレス、Netmask、Default Gatewayの構成を終了します。
- 6 上記の手順が完了したら、**0** キーを押してMainメニューに戻ります。

HTTPおよびHTTPSポートを構成するには:

- 1 **Main**メニューが表示されます。メニューには11のオプションがあります。**Set Web Interface Ports**のオプション番号を選択して、**Web Interface Port Configuration Menu**を開きます。
- 2 オプション1を選択し、ポート番号を設定します。HTTPポートおよびHTTPSポートに使用するポート番号を入力します。
- 3 ネットワークに対して正しい値が表示されていれば、YとタイプしてEnterキーを押します。
- 4 ローカル・ユーザー・ステーションで、ターゲット・デバイス名を入力します。

マウス加速度

リモート・ビデオ・セッション中にマウスの反応が遅くなった場合は、ターゲット・デバイスのオペレーティング・システムでマウスの加速を無効にし、各ターゲット・デバイスでのマウスの加速を**Slow**または**None**に調整します。

Webインターフェイスのインストールとセットアップ

新しいアプライアンスのインストールが完了したら、Webインターフェイスを使用してユニット・パラメーターを設定し、ビデオ・セッションを起動できます。

サポートされているブラウザ

Webインターフェイスでは、以下のブラウザがサポートされています:

- ・ Microsoft Internet Explorer® version 6.x SP1以降
- ・ Firefox バージョン2.0以降

OBWi(On-board Web Interface) の起動

Webインターフェイスは次の手順で起動します:

- 1 Webブラウザを開き、ローカルWebインターフェイスを使用してアプライアンスのIPアドレスを入力します。



注: シリアル・コンソールでデフォルトのHTTP/HTTPSポートを変更しており、IPv4アドレスを使用している場合は、「https://<ipaddress>:<port#>」の形式でIPアドレスを入力します。ここで、「port#」は、シリアル・コンソールで変更したポート番号となります。IPv6アドレスを使用している場合は、「https://[<ipaddress>]:<port#>」の形式でIPアドレスを入力します。ここで、「port#」は、シリアル・コンソールで変更したポート番号となります。IPv6アドレスを使用している場合は、アドレスを角括弧で囲む必要があります。

2 ログイン・ウィンドウが開きます。ユーザー名とパスワードを入力し、OKをクリックします。



注: デフォルトのユーザー名は「Admin」で、パスワードはなしです。

3 Webインターフェイスが開き、**Connections**タブが表示されます。



注: Webインターフェイスを使用するには、コンピューターに1.6.0.11以降のバージョンのJava Runtime Environment(JRE)がインストールされている必要があります。KVMスイッチは、コンピューターにJavaがインストールされているかどうかの検出を試みます。Javaがインストールされていない場合には、<http://www.java.com>からダウンロードし、JNLPファイルをJava WebStartと関連付けてください。



注: Webインターフェイスにいったんログインすると、ログアウトした場合か、または管理者が設定したアイドル・タイムアウトの時間枠を超過した場合を除き、新規セッションを起動する際にログインし直す必要はありません。

基本のソフトウェア操作

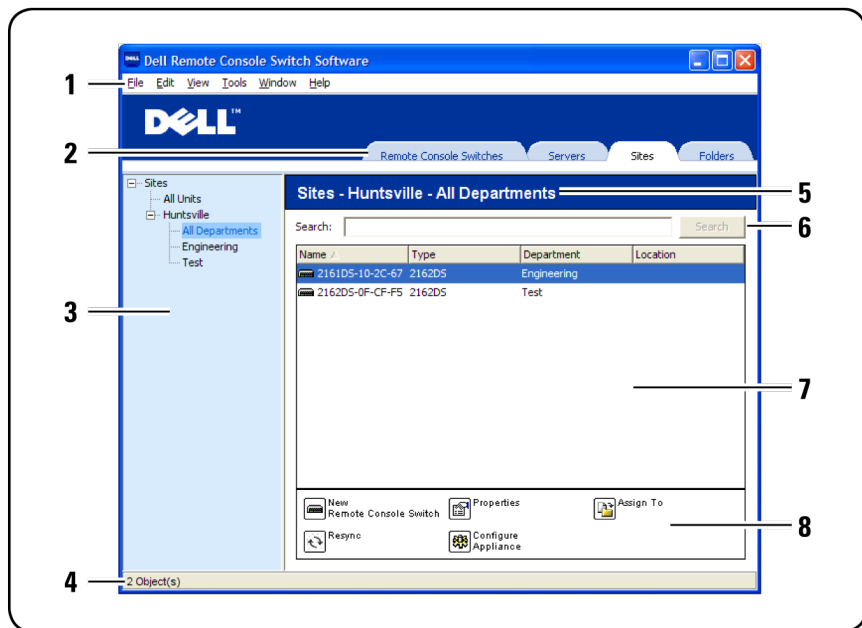
RCSソフトウェアExplorer(以降、Explorerと称します)は、本ソフトウェアの主要インターフェイス(GUI)です。このExplorerから、サポートされているユニットすべての表示、アクセス、管理、カスタム・グループの作成を実行できます。

Explorerでのシステムの表示

ソフトウェアを起動すると、Explorerのメイン・ウィンドウが開きます。Explorerは以下のペインに分割されています：**ビュー選択タブ**、**グループ選択ペイン**、および**ユニット選択ペイン**。これらの領域の内容は、ターゲット・デバイスやアプライアンスが指定されているか、またはどのタスクを実行するかにより異なります。図 3.1には、これらの操作機能が示されています。

ビュー選択タブの一つをクリックし、**Remote Console Switches**、**Servers**、**Sites**、および**Folders**のいずれかのカテゴリでグループ分けされたシステムを表示します。Explorerのデフォルト表示は、ユーザーによる設定が可能です。これらの4つのタブのいずれかを自動的に開くようにすることができます。詳細については、「Explorerでのシステムの表示」(ページ25)を参照してください。デフォルト表示をカスタマイズしない場合、最初のRemote Console Switchが追加されていれば、ExplorerはServersビューで表示されます。

図 3.1: Explorerウィンドウ



- 1 **メニュー・バー**: RCSソフトウェアの種々の機能には、ここからアクセスします。
- 2 **ビュー選択タブ**: Explorerの表示形態を選択するためのビュー選択タブ4種が含まれています。
- 3 **グループ選択ペイン**: 現在のビュー選択タブで利用可能なグループ分けを表すツリー構造が含まれています。**Remote Console Switches**タブ、**Sites**タブ、または**Folders**タブを選択したときに**ユニット選択ペイン**に表示される内容は、選択したグループにより決定されます。
- 4 **ステータス・バー**: ユニットリストに表示されるユニットの数を表示します。
- 5 **ユニット選択ペイン**: 選択された表示形態またはグループに対応する**Search**バー、**ユニットリスト**、および**タスク**ボタンを含むものです。

- 6 **Searchバー**: 検索ボックスに入力したテキストに基づいてデータベースを検索できます。
- 7 **ユニット・リスト**: 現在選択されているグループに含まれるユニットのユニットリスト、または**Searchバー**で実行した検索の結果を表示します。
- 8 **タスク・ボタン**: 実行可能なタスクのボタンが含まれています。ボタンによっては、**ユニットリスト**で選択されたユニットの種類に基づいて変化するものや、固定され、常に表示されるものがあります。

選択したスイッチがWebインターフェイスで有効になっている場合は、Explorerウィンドウの下部に、ResyncとConfigure Applianceの2つのボタンが追加で表示されます。Resyncボタンでは、電源が投入されていないSIPまたはAvocent IQモジュールを検索できます。Configure Applianceボタンでは、Remote Console Switchをアップグレードできます。選択したスイッチがWebインターフェイスで有効になっていない場合は、ResyncとConfigure Applianceのボタンは表示されません。

ウィンドウ表示のカスタマイズ

Explorerウィンドウは常時サイズ変更できます。アプリケーションを起動するたびに、Explorerウィンドウはデフォルト設定のサイズと位置で開きます。

グループ選択ペインとユニット選択ペインは、画面を縦に走る分割ペイン・ディバイダーで分割されています。この2つのペインの表示領域は、ディバイダーを左右に動かすことで変更できます。ディバイダーは、Explorerを起動するたびにデフォルトの位置に戻ります。ディバイダー・ペインとツリー表示制御のショートカットについては、「キーボードとマウス」(ページ109)を参照してください。

起動時にどの表示形態で立ち上げるか(アプライアンス、デバイス、サイト、またはフォルダ)は、Explorerで自動的に選択させることも、ユーザー指定にすることも可能です。詳細については、「ウィンドウ表示のカスタマイズ」(ページ27)を参照してください。

コラム上部の分類バーをクリックすると、ユニット・リストの順番や分類別を変更できます。コラムヘッダーの上向き矢印は、リストがこのフィールド名で昇順に配列されていることを示します。下向き矢印は、リストがこのフィールド名で降順に配列されていることを示します。

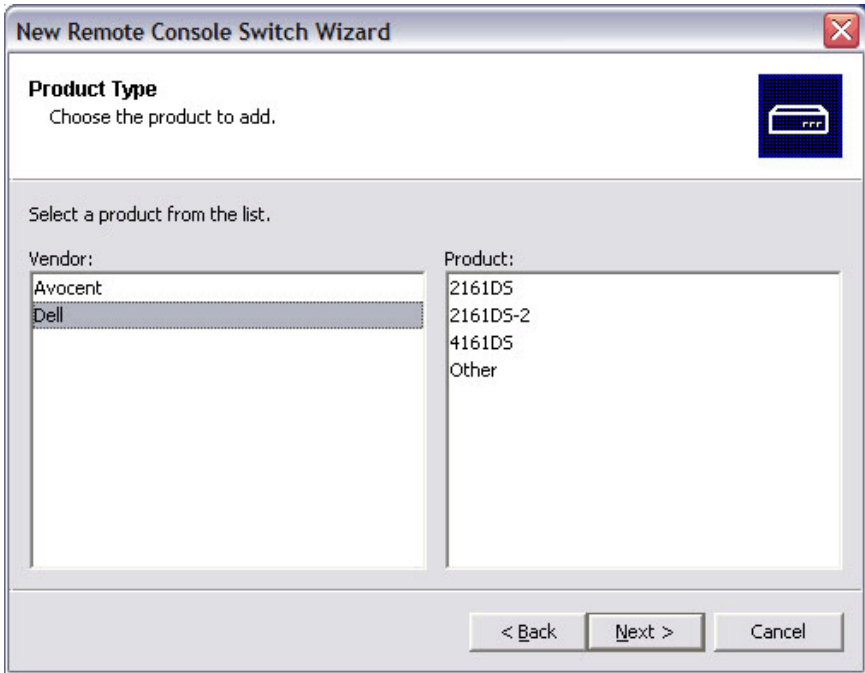
Remote Console Switch(DellまたはAvocent)の追加

RCSソフトウェアでは、Dell Remote Console Switchに加えて、アボセント製スイッチを管理することもできます。したがって、お使いのRCSソフトウェアのデータベースにRemote Console Switchを追加するプロセスの中で、追加するスイッチのベンダーと製品タイプを選択するように要求されます。Remote Console Switchまたはアボセント製スイッチが追加されると、**ユニットリスト**に表示されます。手動でRemote Console Switchを追加したり、探したりすることができます。ユニットはIPv4またはIPv6のIPアドレスで追加することができます。

割り当てたIPアドレスで新規のRemote Console Switchを追加するには:


- 1 Explorerメニューから**File** → **New** → **Remote Console Switch**を順に選択します。
-または-
New Remote Console Switchタスク・ボタンをクリックします。New Remote Console Switchウィザードが表示されます。
- 2 **Next**をクリックして続行します。**Product Type**ダイアログ・ボックスが表示され、Remote Console Switchのベンダーと製品の選択が要求されます。

図 3.2: Product Typeダイアログ・ボックス



- 3 **Vendor**を選択します。各ベンダーについて、サポートされる製品名が **Product**リストに表示されます。製品を選択します。

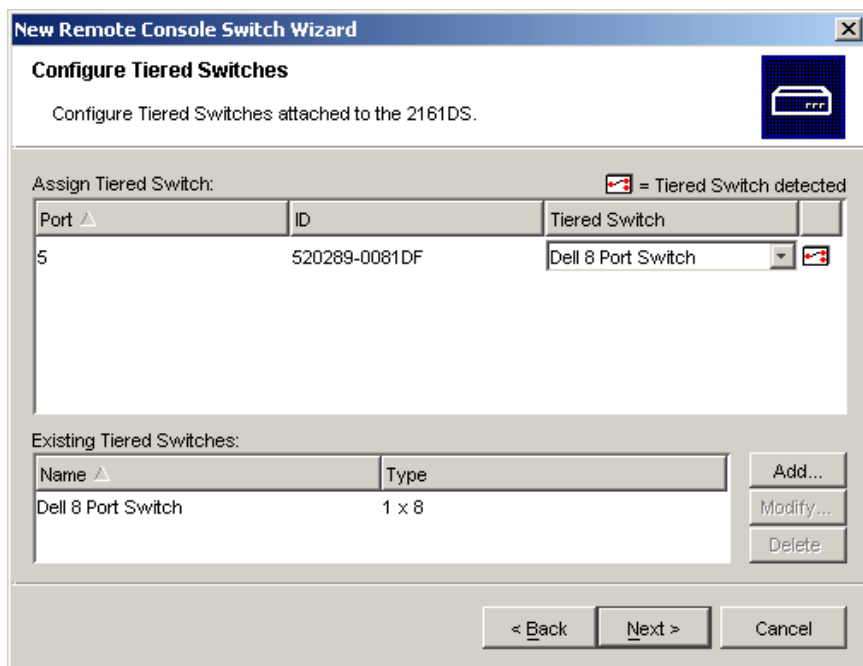
追加するRemote Console Switchのモデルが、**Product**リスト内に存在しない場合は、**Other**を選択します。この方法で追加したスイッチは、検出後に**Product**リストに追加され、Remote Console Switchを次回追加する際にはリストから選択できるようになります。

 **注:** New Remote Console Switch Wizardの各ダイアログ・ボックスに、Productリストから選択したスイッチの種類が表示されます。

- 4 **Next**をクリックします。
- 5 Remote Console Switchに割り当てられたIPアドレスがあるかどうかを問うメッセージが表示されます。**Yes**をクリックした後、**Next**をクリックします。

- 6 **Locate** ウィンドウが表示されます。ホスト名またはIPアドレス、HTTPポート、およびHTTPSポートを入力し、**Next** をクリックします。IPv4 のアドレスは、xxx.xxx.xxx.xxxのドット表記式で入力します。IPv6のアドレスは、16進数のFD00:172:12:0:0:0:33の形式、またはFD00:172:12::33の圧縮形式で入力します。
- 7 RCSソフトウェアは、指定されたユニットと、電源が投入されたSIP、Avocent IQモジュール、およびサーバー名がある場合はこれらをすべて検索します。電源が投入されていないSIPモジュールやAvocent IQモジュールを検索する場合は、ソフトウェアの再同期機能にアクセスし、**Include Offline SIPs** チェック・ボックスをクリックして有効にします。
- 8 **Next** をクリックします。
- 9 接続されているレガシー・スイッチがRCSソフトウェアによって検出された場合は、**Configure Tiered Switches** ダイアログ・ボックスが表示されます。このダイアログ・ボックスには、Remote Console Switchから検索された全部のSIP EIDのリスト、さらに、ケーブルが接続されているティアド・スイッチがある場合はそれらも含まれます。このダイアログ・ボックスの初回表示の時点では、すべてのスイッチは**None**に設定されています。検出されたスイッチには、ドロップダウン・リストの隣にアイコンが表示されます。
 - a. **Existing Tiered Switches** フィールドには、データベースで現在定義されているスイッチ全部がリストされます。リストを変更する場合は、**Add**、**Modify**、または**Delete** をクリックします。
 - b. スwitchに接続されているSIPモジュールまたはAvocent IQモジュールごとに、ドロップダウン・リストから適切なスイッチを選択して関連付けます。

図 3.3: Configure Tiered Switchesダイアログ・ボックス



10 Remote Console Switch Wizardの最後のページに到達したら、Finishをクリックしてウィザードを終了し、メイン・ウィンドウに戻ります。使用しているRemote Console Switchは、この段階でユニット選択ペインの表示になります。

新たなRemote Console Switchで割り当てられたIPアドレスを持たないものを追加するには:

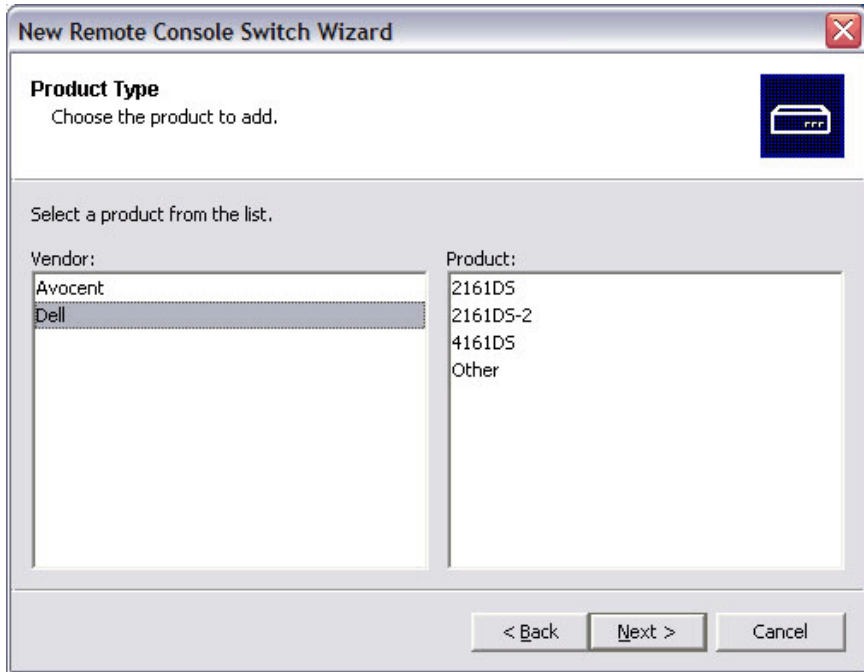
1 ExplorerメニューからFile → New → Remote Console Switchを順に選択します。

-または-

New Remote Console Switch タスク・ボタンをクリックします。New Remote Console Switchウィザードが表示されます。

- 2 **Next**をクリックして続行します。**Product Type**ダイアログ・ボックスが表示され、Remote Console Switchのベンダーと製品の選択が要求されます。

図 3.4: Product Typeダイアログ・ボックス



- 3 **Vendor**を選択します。各ベンダーについて、サポートされる製品名が **Product**リストに表示されます。製品を選択します。
追加するRemote Console Switchのモデルが、**Product**リスト内に存在しない場合は、**Other**を選択します。この方法で追加したスイッチは、検出後に**Product**リストに追加され、Remote Console Switchを次回追加する際にはリストから選択できるようになります。
- 4 **Next**をクリックします。
- 5 Remote Console Switchに割り当てられたIPアドレスがあるかどうかを問うメッセージが表示されます。**No**をクリックした後、**Next**をクリックします。

6 **Network Address**ウィンドウが表示されます。ユニットに割り当てるIPアドレス、サブネット・マスク (IPv4モードの場合) またはプレフィックス長 (IPv6モードの場合)、およびゲートウェイを入力し、**Next**をクリックします。IPv4のアドレスは、xxx.xxx.xxx.xxxのドット表記式で入力します。IPv6のアドレスは、16進数のFD00:172:12:0:0:0:33の形式、またはFD00:172:12::33の圧縮形式で入力します。



注: Remote Console Switchは、動的ホスト構成プロトコル (DHCP) および静的IPアドレスをサポートしています。Dellでは、IPアドレスをユニット毎に指定しておくこと、さらにRemote Console Switchユニットがネットワークに接続されている間はアドレスを静的にしておくことをお勧めします。

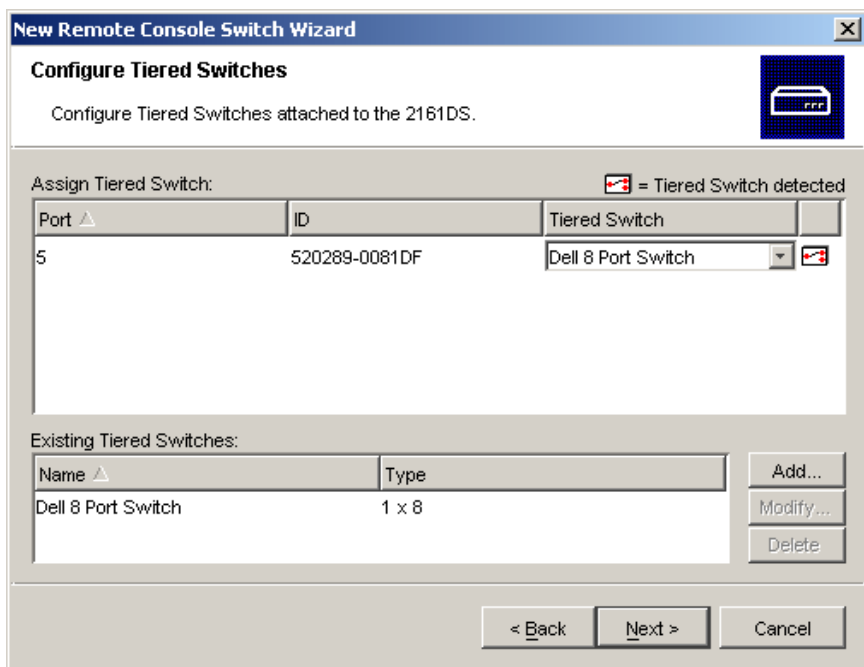
7 **Select Remote Console Switch**ウィンドウが表示され、検出された新しいRemote Console Switchのリストから追加するユニットを選択するように求めるメッセージが表示されます。製品を選択し、**Next**をクリックします。

8 **Configuring Remote Console Switch**ウィンドウが現れ、IP情報が正しく設定されたかどうかが表示されます。構成が正しく実行された場合、ソフトウェアは新しいRemote Console SwitchおよびすべてのSIP、Avocent IQモジュールと、新しいRCSに対応するサーバー名を検索します。**Next**をクリックします。

9 接続されているレガシー・スイッチがソフトウェアによって検出された場合は、**Configure Tiered Switches**ダイアログ・ボックスが表示されます。このダイアログ・ボックスには、Remote Console Switchから検索されたSIPおよびAvocent IQモジュールのすべてのEIDと、SIPとAvocent AVRIQに接続されているティアド・スイッチがある場合はそのスイッチのリストが表示されます。

- a. **Existing Tiered Switches**フィールドには、データベースで現在定義されているスイッチ全部がリストされます。リストは追加、削除または変更ができます。
- b. スイッチに接続されているSIPモジュールまたはAvocent IQモジュールごとに、ドロップダウン・リストから適切なスイッチを選択して関連付けます。

図 3.5: Configure Tiered Switchesダイアログ・ボックス



- 10 終了したら、**Finish**をクリックして、ウィザードを終了しメイン・ウィンドウに戻ります。使用中のRemote Console Switchは、この時点で**ユニット選択**ペイン内に表示されるはずですが。

Remote Console Switchを見つけるには：

- 1 ソフトウェアのExplorerメニューから、**Tools** → **Discover**を順に選択します。Discover Wizardが表示されます。**Next**をクリックして続行します。
- 2 **Address Range**ページが表示されます。次の手順のいずれかを実行します：
 - IPv4モードを使用している場合、**Use IPv4 address range**を選択し、検索するIPアドレスの範囲を**To Address**と**From Address**の各欄に入力します。IPv4のアドレスは、xxx.xxx.xxx.xxxのドット表記式で入力します。
 - または-

IPv6モードを使用している場合、**Use IPv6 address range**を選択し、検索するIPアドレスの範囲を**To Address**と**From Address**の各欄に入力します。IPv6のアドレスは、16進数のFD00:172:12:0:0:0:0:33の形式、またはFD00:172:12::33の圧縮形式で入力します。

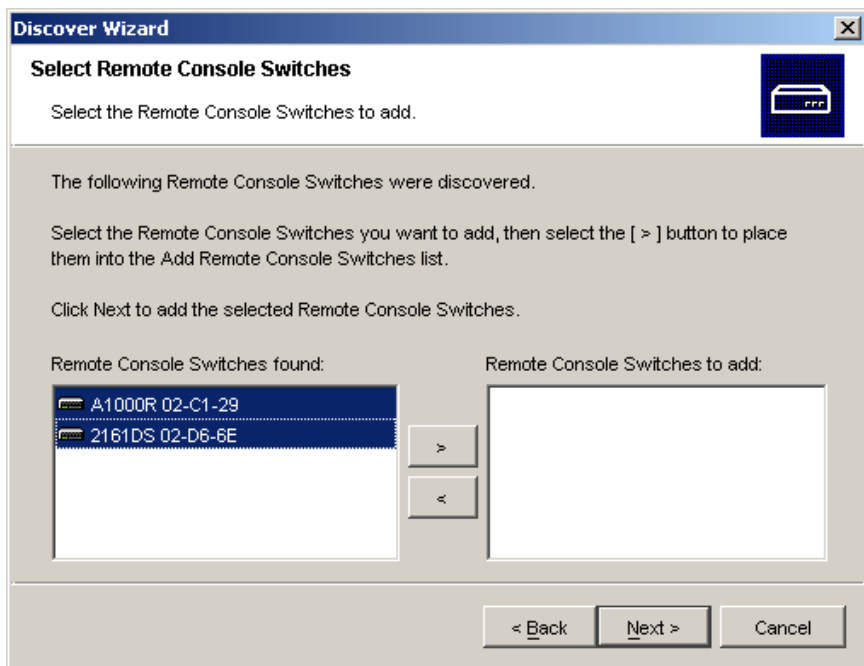
- 3 Remote Console Switchがシリアル・コンソールでデフォルト設定から変更されている場合には、HTTPとHTTPSのデフォルトのポート番号も変更できません。これには、新しいポート番号を**HTTP Port**と**HTTPS Port**のフィールドに入力します。**Next**をクリックして続行します。
- 4 **Searching Network**という進行状態を示すバーが表示されます。進行状態を示すテキストに、範囲指定された合計数のうち何個のアドレスが検索されたかが示され、また見つかったRemote Console Switchの数、またはアボセント製スイッチの数が示されます。1台またはそれ以上の新しいRemote Console SwitchまたはAvocentスイッチが検索されると、ウィザードは「Select Remote Console Switches to Add」のページを表示します。このページから、ローカル・データベースに追加するRemote Console Switchを選択できます。

-または-

新しいRemote Console Switchが見つからない場合(または**Stop**をクリックした場合)は、**ウィザード**によって**No New Remote Console Switches Found**ページが表示されるので、手動でスイッチを追加する必要があります。詳細については、この前の手順説明を参照してください。


- 5 追加するRemote Console Switchをクリックし、**Add(>)** ボタンをクリックして、選択項目を**Remote Console Switches to Add**リストに移動します。

図 3.6: Select Remote Console Switches to Addダイアログ・ボックス



- 6 追加するRemote Console Switchのすべてについて手順5を繰り返します。Nextをクリックして続行します。
- 7 新しいスイッチが追加される間、Adding Remote Console Switchesという進行状態を示すバーが表示されます。選択されたスイッチがすべてローカル・データベースに追加されると、Discover Wizard Completedページが表示されます。Finishをクリックしてウィザードを終了し、メイン・ウィンドウに戻ります。新しいスイッチはこの時点でユニット選択ペインに含まれているはずでず。
- 8 何らかの理由で(追加プロセスの間にStopをクリックした場合を含め)1つまたは複数のスイッチがローカル・データベースに追加できなかった場合は、Discover Wizard Not All Remote Console Switches Addedページが表示されます。このページには、選択したスイッチ全部とそれぞれのステータスがリストされます。ステータスで、Remote Console Switchがローカル・データ

ベースに追加された場合はその旨が、されなかった場合には行われなかった理由が表示されます。リストの参照が終わったら、**Done**をクリックします。

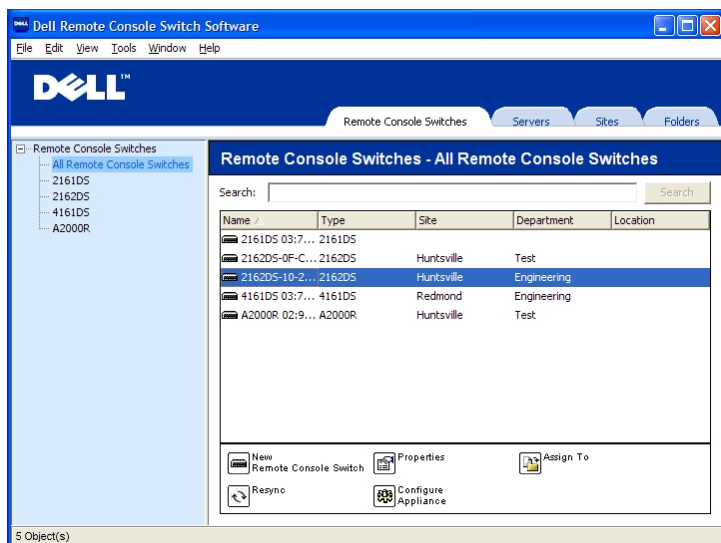
 **注:** 同一のIPアドレスを持つRemote Console Switchがユニット検出時にデータベースに存在する場合には、検出されたスイッチは無視され、次のウィザード・ページ上には表示されません。

Remote Console Switchのアクセス

ソフトウェアのRemote Console Switchesタブをクリックすると、ローカル・データベースで現在定義されているスイッチのリストが表示されます。Remote Console Switchにアクセスするには、まずユーザー名とパスワードを入力してログインしなければなりません。デフォルトのユーザー名は、パスワードなしのAdmin(大文字と小文字の区別あり)です。特定のRemote Console Switchにログインすると、ソフトウェアのセッションの間、ソフトウェアはユーザー名とパスワードをメモリーのキャッシュに保存します。

 **注:** ログイン・アカウント情報をクリアして別のユーザー名とパスワードで再ログインする場合は、Tools→Clear Login Credentialsを順に選択します。

図 3.7: Remote Console Switchのビュー・タブが選択された状態



Remote Console Switchへログインするには:

- 1 Explorerで**Remote Console Switches**タブをクリックします。
- 2 **ユニット選択**ペインのRemote Console Switchをダブルクリックします。
-または-
ユニット選択ペインでRemote Console Switchを選択し、**Configure Remote Console Switch**タスク・ボタンをクリックします。
-または-
ユニット選択ペインのRemote Console Switchを右クリックします。ポップアップ・メニューが表示されます。**Configure Remote Console Switches**を選択します。
-または-
ユニット選択ペインのRemote Console Switchをクリックして、Enterキーを押します。
- 3 利用できる場合は、キャッシュに保存されているログイン・アカウント情報が使用されます。利用できない場合は、ログイン・プロンプトが表示されます。ユーザー名とパスワードを入力します。今回がRemote Console Switchへの最初のアクセスである場合、またはユーザー名とパスワードが割り当てられていない場合は、デフォルトのユーザー名であるAdmin(大文字と小文字を区別)をパスワードなしで入力します。
- 4 **OK**をクリックして、Remote Console Switchにアクセスします。これにより、OBWIが起動します。OBWIの詳細については、『Remote Console Switch インストーラ/ユーザー・ガイド』を参照してください。
-または-
Cancelをクリックし、ログインせずに終了します。

システム内でRemote Console Switchを検索するには:

- 1 ソフトウェアで**Remote Console Switch**タブをクリックし、検索テキスト・ボックスにカーソルを置きます。

- 2 検索情報を入力します。この情報には、Remote Console Switchの名前または他の**ユニット選択**リストの見出しに入力した情報(**Type**、**Location**、IPアドレスなど)が使用できます。
- 3 **Search** ボタンをクリックします。結果は**ユニット**リストに表示されます。
- 4 検索の結果を参照します。

—または—

Clear Resultsボタンをクリックし、リスト全体をもう一度表示します。

VNCまたはRDPビューアの起動

RCSソフトウェアは、ユーザー定義のVirtual Network Computing(VNC) およびRemote Desktop Protocol(RDP) のビューアをサポートしています。VNCまたはRDPビューアを起動するには、RCSソフトウェアのExplorerから**Server**タブを選択します。ユニット・リストからサーバーを選択し、画面の右下にある**VNC**または**RDP** ボタンをクリックします。



注: 「VNC」ボタンおよび「RDP」ボタンは、サーバーでリンクが設定されている場合のみ表示されます。詳細については、VNCとRDPのプロパティとオプションのセクションを参照してください。

サーバーとスイッチのプロパティの変更

ソフトウェアで、**General**、**Network**、**Information**、**Connections**(デバイス用)、**VNC**および**RDP**(ビューア・アプリケーション用) のタブにある**Properties**ダイアログ・ボックスから、個々のサーバーまたはスイッチのプロパティを変更できます。

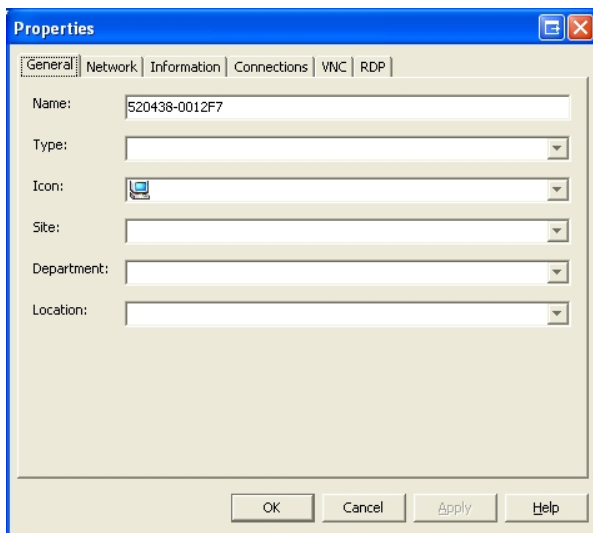
一般プロパティ

Generalタブでは、Remote Console Switchや接続されているサーバーの名前と表示アイコンを変更できます。スイッチやサーバーを、特定のサイトやロケーション、またはフォルダに割り当てることもできます。さらにサーバーについては、種類を変更することもできます。

一般プロパティを変更するには:

- 1 ソフトウェアで**Remote Console Switches**タブまたは**Servers**タブをクリックし、**ユニット選択**リストからユニットを1つ選択します。
- 2 Explorer メニューから**View** → **Properties**を順に選択します。
-または-
Propertiesタスク・ボタンをクリックします。
-または-
ユニットを右クリックして、**Properties**を選択します。**Properties**ダイアログ・ボックスが表示されます。

図 3.8: サーバーのGeneral Propertiesタブ



- 3 ユニットの名前を入力します。既存名と同一の名称は使用できません。
- 4 (オプション: サーバーのみ) サーバーの種類を選択します。ドロップダウン・リスト内に選択項目がない場合、テキスト・フィールドに新しいサーバーの種類の名称を入力します。一度入力されると、それ以降の割り当てのドロップダウン・リストで、このオプションが使用できるようになります。
- 5 このユニットを表すアイコンを選択します。

- 6 (オプション) ユニットのサイトを、部門、またはロケーションに割り当てます。オプションがドロップダウン・リストにない場合は、テキスト・フィールドに新規の割り当て名を入力します。一度入力されると、それ以降の割り当てのドロップダウン・リストで、このオプションが使用できるようになります。
- 7 **Apply**をクリックして新しい設定を保存します。
 - または-
 - OKをクリックして新しい設定を保存し、Propertiesウィンドウを閉じます。
 - または-
 - Cancelをクリックして、新しい設定を保存せずに終了します。

サーバーのネットワーク・プロパティ

Networkタブでは、ビューア・セッションを起動せずに、サーバーのWebサーバーにブラウザを起動する場合の、サーバーのブラウザURLを設定できます。

ネットワーク・プロパティを変更するには:

- 1 ソフトウェアでServersタブをクリックした後で、**ユニット選択**リストからサーバーを1つ選択します。
- 2 Explorer メニューから**View** → **Properties**を順に選択します。
 - または-
 - Propertiesタスク・ボタンをクリックします。
 - または-
 - ユニットを右クリックして、**Properties**を選択します。Propertiesダイアログ・ボックスが表示されます。
- 3 Networkタブをクリックして、ブラウザでサーバーに接続する際に使用するURLを入力します。フィールドに値が含まれている場合には、タスク・バーに**Browse**ボタンが表示され、指定されたURLに対するブラウザを立ち上げることができるようになります。
- 4 **Apply**をクリックして新しい設定を保存します。
 - または-
 - OKをクリックして新しい設定を保存し、ウィンドウを閉じます。
 - または-

Cancelをクリックして、新しい設定を保存せずに終了します。

スイッチのネットワーク・プロパティ

ネットワークの再構成を行う場合は、**Network**タブでスイッチのIPアドレスを変更できます。

ネットワーク・プロパティを変更するには：

1 ソフトウェアで**Remote Console Switches**タブをクリックした後で、ユニット選択リストからユニットを1つ選択します。

2 Explorer メニューから**View → Properties**を順に選択します。

-または-

Propertiesタスク・ボタンをクリックします。

-または-

ユニットを右クリックして、**Properties**を選択します。**Properties**ダイアログ・ボックスが表示されます。

3 **Network**タブをクリックして、**Remote Console Switch**のアドレスを入力します。このフィールドには、IPドット表記やドメイン名も入力できます。既に使用されているアドレスは使用できません。またフィールドは空欄のままにすることはできません。最高で128文字を入力でき、IPv4またはIPv6アドレスのどちらも使用できます。または、IPv4とIPv6を同時にデュアルスタックできます。



注: Dell 1081AD および 2161AD スイッチは、IPv4とIPv6モードの同時使用には対応していません。

4 シリアル・コンソールで**Remote Console Switch**のポート番号を変更した場合は、**HTTP**および**HTTPS**のポート番号を**HTTP Port**と**HTTPS Port**のフィールドにそれぞれ入力します。シリアル・コンソールでのポート番号の変更については、「**HTTP/HTTPS オプション**」(ページ50) を参照してください。

5 **Apply**をクリックして新しい設定を保存します。

-または-

OKをクリックして新しい設定を保存し、ウィンドウを閉じます。

-または-

Cancelをクリックして、新しい設定を保存せずに終了します。

情報プロパティ

Informationタブでは、説明、連絡先情報や追加コメントなどのスイッチやサーバーに関連した情報を入力できます。

情報プロパティを変更するには:

- 1 ソフトウェアで**Remote Console Switches**タブまたは**Servers**タブをクリックし、**ユニット選択**リストからユニットを1つ選択します。
- 2 Explorerメニューから**View** → **Properties**を順に選択します。
-または-
Propertiesタスク・ボタンをクリックします。
-または-
ユニットを右クリックして、**Properties**を選択します。**Properties**ダイアログ・ボックスが表示されます。
- 3 (オプション) **Information**タブをクリックし、ユニットの説明を入力します。下記のフィールドには任意の情報を保存できます。
 - a. **Description**フィールドには、最大128文字の説明を入力します。
 - b. **Contact**フィールドには、最大128文字の説明を入力します。
 - c. **Contact Phone Number**フィールドには、最大64文字の説明を入力します。
 - d. **Comments**フィールドには、最大256文字の説明を入力します。
- 4 **Apply**をクリックして新しい設定を保存します。
-または-
OKをクリックして新しい設定を保存し、ウィンドウを閉じます。
-または-
Cancelをクリックして、新しい設定を保存せずに終了します。

サーバーの接続プロパティ

Connectionsタブには、選択したサーバーへのアクセスに使用される物理接続パスと、ビデオなどの接続のタイプが表示されます。

接続プロパティを表示するには:

- 1 ソフトウェアで**Servers**タブをクリックした後で、**ユニット選択**リストからサーバーを1つ選択します。
- 2 Explorer メニューから**View** → **Properties**を順に選択します。
-または-
Propertiesタスク・ボタンをクリックします。
-または-
サーバーを右クリックして、**Properties**を選択します。**Properties**ダイアログ・ボックスが表示されます。
- 3 **Connections**タブをクリックし、サーバーの接続を表示します。Connectionsプロパティは、サーバーのみが利用でき、読み取り専用です。このデバイスへのアクセスに使用される物理的接続バスと、ビデオなどの接続の種類が表示されます。
- 4 プロパティの確認後は、**OK**または**Cancel**をクリックしてウィンドウを閉じます。

VNCプロパティ

ユーザー指定のVNCアプリケーションを指定する場合、コマンド・ライン引数を含めることができます。コマンド・ラインの配置についてマクロを選択できます。これは、IPアドレス、ポート番号、ユーザー名、パスワードなどの変数を自動置換する場合に便利です。Windows、Linux、およびUNIX® オペレーティング・システムが動作するコンピューター用の独自のGUIを持たないVNCコマンドの場合、OSのコマンド・ウィンドウからVNCアプリケーションを起動させることができます。

VNCプロパティを変更するには:

- 1 ユニット・リストからサーバーを選択します。
- 2 Remote Console SwitchのExplorerメニューから**View** → **Properties**を順に選択します。
-または-
Propertiesタスク・ボタンをクリックします。
-または-

ユニットを右クリックします。ポップアップ・メニューから**Properties**を選択します。**Properties**ダイアログ・ボックスが表示されます。


- 3 **VNC**タブをクリックします。
- 4 サーバーの場合のみ、IPアドレス・フィールドに、IPアドレス(ドット表記法)またはドメイン名(1~128文字)を入力します。スペースは使用できません。重複したアドレスも使用できます。IPv4およびIPv6のアドレスを使用できます。
- 5 Portフィールドにポート番号(23~65535)を入力します。空欄の場合はポート23が使用されます。
- 6 **Use Default**チェック・ボックスを有効(チェック印をつける)または無効(チェック印を外す)にします。この設定が有効になっている場合、**Options**で指定されたデフォルトのグローバル設定が使用され、**Application to Launch**領域の他の部分はすべて無効になります。
- 7 ディレクトリ・パスおよび名前を入力するか、**Browse**ボタンをクリックしてパスと名前を指定します。
- 8 パスおよび名前の中のボックスに、コマンド・ライン引数を入力します。
-または-
コマンド・ラインのカーソル位置に事前定義されたマクロを挿入するには、**Insert Macro**リスト・ボックスをクリックしてドロップダウン・メニューからマクロを選択します。RCSソフトウェアは、アプリケーションの実行時にこれらの変数を自動的に置換します。
- 9 **Launch in command window**チェック・ボックスを有効または無効にします。有効になっている場合、ユーザー指定のVNCアプリケーションがOSのコマンド・ウィンドウから起動します。
- 10 **OK**をクリックします。

RDPプロパティ

ユーザー指定のRDPアプリケーションを指定する場合、コマンド・ライン引数を含めることができます。コマンド・ラインの配置についてマクロを選択できます。これは、IPアドレス、ポート番号、ユーザー名、パスワードなどの変数を自動置換する場合に便利です。Windows、Linux、およびUNIX® オペレーティング・システムが

動作するコンピューター用の独自のGUIを持たないRDPコマンドの場合、OSのコマンド・ウィンドウからRDPアプリケーションを起動させることができます。

RDPプロパティを変更するには:

- 1 ユニット・リストからサーバーを選択します。
- 2 Remote Console SwitchのExplorerメニューから**View** → **Properties**を順に選択します。
-または-
Propertiesタスク・ボタンをクリックします。
-または-
ユニットを右クリックします。ポップアップ・メニューから**Properties**を選択します。**Properties**ダイアログ・ボックスが表示されます。
- 3 該当する場合は、**RDP**タブをクリックします。
- 4 サーバーの場合のみ、IPアドレス・フィールドに、IPアドレス(ドット表記法)またはドメイン名(1~128文字)を入力します。スペースは使用できません。重複したアドレスも使用できます。IPv4アドレスまたはIPv6アドレスを使用できます。または、IPv4とIPv6のアドレスを同時に使用できます。
 **注:** Dell 1081AD および 2161AD スイッチは、IPv4とIPv6モードの同時使用には対応していません。
- 5 Portフィールドにポート番号(23~65535)を入力します。空欄の場合はポート23が使用されます。
- 6 **Use Default**チェック・ボックスを有効(チェック印をつける)または無効(チェック印を外す)にします。この設定が有効になっている場合、**Options**で指定されたデフォルトのグローバル設定が使用され、**Application to Launch**領域の他の部分はすべて無効になります。
- 7 ディレクトリ・パスおよび名前を入力するか、**Browse**ボタンをクリックしてパスと名前を指定します。
- 8 パスおよび名前下のボックスに、コマンド・ライン引数を入力します。
-または-

コマンド・ラインのカーソル位置に事前定義されたマクロを挿入するには、**Insert Macro**リスト・ボックスをクリックしてドロップダウン・メニューからマクロを選択します。RCSソフトウェアは、アプリケーションの実行時にこれらの変数を自動的に置換します。

9 **Launch in command window**チェック・ボックスを有効または無効にします。有効になっている場合、ユーザー指定のRDPアプリケーションがOSのコマンド・ウィンドウから起動します。

10 **OK**をクリックします。

ブラウザ・ウィンドウを介したサーバーへのアクセス

必要に応じて、Webブラウザでサーバーに接続するようにソフトウェアを構成できます。まずサーバーを選択し、**Properties**ダイアログ・ボックスでそのサーバーのWebサーバー・ネットワークを設定します。その後は、サーバーを選択すると、**Browse**タスク・ボタンが表示されます。



注: ExplorerのOptionsダイアログ・ボックスで使用するブラウザを選択することができます。



注: ブラウザではどのURLにも接続できますが、サーバーに対するBrowser Networkプロパティが設定されている場合、この機能はサービス・プロセッサ管理インターフェイス(integrated Dell Remote Access Card (iDRAC) など)で設定したサーバーに特に適切となります。

ブラウザ・ウィンドウでサーバー・ネットワークを起動するには:

- 1 ソフトウェアの**ユニット選択**ペインでサーバーを選択します。
- 2 このサーバーのネットワークのブラウザURLを**Properties**ダイアログ・ボックスで定義している場合は、**Browse**タスク・ボタンが表示されます。**Browse**タスク・ボタンをクリックします。確認したURLがブラウザ・ウィンドウで開きます。

サーバーとスイッチのオプションの変更

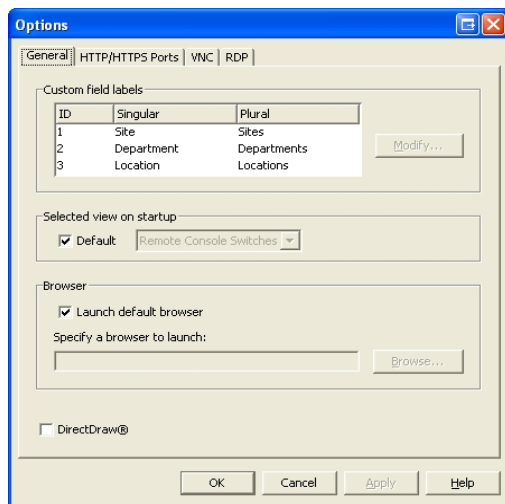
RCSソフトウェアのOptionsダイアログ・ボックスから、**General**、**HTTP/HTTPS Ports**、**VNC**、および**RDP**などのサーバーやスイッチのオプションを個別に変更できます。

一般オプション

カスタム・フィールド・ラベルを変更するには:

- 1 ExplorerメニューからTools → Optionsを順に選択します。Optionsダイアログ・ボックスが表示されます。

図 3.9: Optionsダイアログ・ボックスのカスタム・フィールド・ラベル



- 2 変更するフィールド・ラベルを選択し、Modifyボタンをクリックします。Modify Custom Field Labelダイアログ・ボックスが表示されます。
- 3 このフィールドラベルを単数形と複数形で入力します。有効な文字長は、1～32文字です。空欄にすることはできません。スペースの使用は中間では構いませんが、最初と最後には使用できません。
- 4 OKをクリックして、新しいフィールド・ラベルを保存します。
-または-
Cancelをクリックすると、変更を保存しないで終了します。

デフォルト・ブラウザ

ブラウザ・オプションでは、URLが指定されているターゲット・デバイスのBrowseボタンをクリックしたとき、またはRCSオンライン・ヘルプにアクセスしたときに起動す

るブラウザを指定します。現在のコンピューターでのデフォルト・ブラウザをオンにするか、または利用可能な他のブラウザから選んでください。

デフォルト・ブラウザの表示または変更は、以下の手順で行います：

- 1 Explorerメニューから **Tools** → **Options**を順に選択します。General Options ウィンドウが開きます。
- 2 次の手順のいずれかを実行します：
 - ・ **Browser** フィールドで、**Launch Default Browser** チェック・ボックスを選択してデフォルトのブラウザを指定します。
 - ・ **Launch Default Browser** チェック・ボックスの選択を解除します。**Browse** ボタンをクリックし、このコンピューターで使用できるブラウザを選択します。また、使用可能なブラウザのフル・パスを入力することもできます。
- 3 次の手順のいずれかを実行します：
 - ・ 別のタブをクリックして異なるプロパティの変更を行います。
 - ・ 完了したらOKをクリックして、新しい設定を保存します。
 - ・ **Cancel**をクリックして、新しい設定を保存せずに終了します。

DirectDrawサポートの変更(Windows OSのみ)

このソフトウェアはDirectDrawをサポートしています。DirectDrawは、ビデオ表示メモリー、ハードウェア・オーバーレイ、およびページ・フリッピングを、グラフィカル・デバイス・インターフェイス(GDI)を介さず、直接操作できるようにする規格です。DirectDrawを採用することで、よりスムーズなアニメーションや、動画・画像ディスプレイの多いソフトウェアでのよりよい性能が得られます。

ただし、使用機器でソフトウェア・カーソルやポインターのシャドー機能を有効にしている場合や、ビデオ・ドライバーがDirectDrawをサポートしていない場合には、ビューアのタイトル・バー上にマウスカーソルを合わせた時にフリッカー(点滅)現象が起きることがあります。

ソフトウェアのカーソルまたはポインター・シャドウを無効にするか、ビデオ・カードに新しいドライバーを読み込む、またはDirectDrawを無効にすることもできます。

DirectDrawを無効にするには：

- 1 Explorerメニューから**Tools** → **Options**を順に選択します。**Options**ダイアログ・ボックスが表示されます。
- 2 **DirectDraw**チェック・ボックスをクリックして無効にします。
- 3 **OK**をクリックします。



注: DirectDrawチェックボックスは、Windowsベースのオペレーティング・システムの場合にのみ表示されます。

HTTP/HTTPSオプション

Remote Console Switchとソフトウェアでは、ポート80をデフォルトのHTTPポートに、ポート443をデフォルトのHTTPSポートとして使用します。デフォルト・ポート番号は、Optionsダイアログ・ボックスの**HTTP/HTTPS Ports**タブで変更できます。

- 1 Explorerメニューから**Tools** → **Options**を順に選択します。**Options**ダイアログ・ボックスが表示されます。
- 2 **HTTP/HTTPSポート**タブをクリックします。
- 3 HTTPおよびHTTPSポートの新しいデフォルト・ポート番号を入力します。
- 4 **OK**をクリックします。

VNCオプション

このソフトウェアは、プロパティ・ページを介してユーザー定義のVNCビューアをサポートしています。VNCタブではユーザー指定のVNCアプリケーションを検索できます。そのコマンド・ライン引数を含めることもできます。コマンド・ラインの配置についてマクロを選択できます。これは、IPアドレス、ポート番号、ユーザー名、パスワードなどの変数を自動置換する場合に便利です。標準のWindows、Linux、およびUNIX用の独自のGUIを持たないVNCコマンドの場合、OSのコマンド・ウィンドウからVNCアプリケーションを起動させることができます。

VNCオプションを変更するには:

- 1 Explorerメニューから**Tools** → **Options**を順に選択します。**Options**ダイアログ・ボックスが表示されます。
- 2 **VNC**タブをクリックします。

- 3 **Application to Launch**フィールドに、ディレクトリ・パスおよび名前を入力するか、**Browse**ボタンをクリックしてパスと名前を指定します。
- 4 パスおよび名前下のボックスに、コマンド・ライン引数を入力します。
-または-
コマンド・ラインのカーソル位置に事前定義されたマクロを挿入するには、**Insert Macro**リスト・ボックスをクリックしてドロップダウン・メニューからマクロを選択します。RCSソフトウェアは、アプリケーションの実行時にこれらの変数を自動的に置換します。
- 5 **Launch in command window**チェック・ボックスを有効または無効にします。有効になっている場合、ユーザー指定のVNCアプリケーションがOSのコマンド・ウィンドウから起動します。
- 6 **OK**をクリックします。

RDPオプション

このソフトウェアは、プロパティ・ページを介してユーザー定義のRDPビューアをサポートしています。RDPタブではユーザー指定のRDPアプリケーションを検索できます。そのコマンド・ライン引数を含めることもできます。コマンド・ラインの配置についてマクロを選択できます。これは、IPアドレス、ポート番号、ユーザー名、パスワードなどの変数を自動置換する場合に便利です。標準のWindows、Linux、およびUNIX用の独自のGUIを持たないRDPコマンドの場合、OSのコマンド・ウィンドウからRDPアプリケーションを起動させることができます。

RDPオプションを変更するには:

- 1 Explorerメニューで、**Options**ダイアログ・ボックスが表示されます。
- 2 **RDP**タブをクリックします。
- 3 **Application to Launch**フィールドに、ディレクトリ・パスおよび名前を入力するか、**Browse**ボタンをクリックしてパスと名前を指定します。
- 4 パスおよび名前下のボックスに、コマンド・ライン引数を入力します。
-または-
コマンド・ラインのカーソル位置に事前定義されたマクロを挿入するには、**Insert Macro**リスト・ボックスをクリックしてドロップダウン・メニューか

らマクロを選択します。RCSソフトウェアは、アプリケーションの実行時にこれらの変数を自動的に置換します。

- 5 **Launch in command window**チェック・ボックスを有効または無効にします。有効になっている場合、ユーザー指定のRDPアプリケーションがOSのコマンド・ウィンドウから起動します。
- 6 **OK**をクリックします。

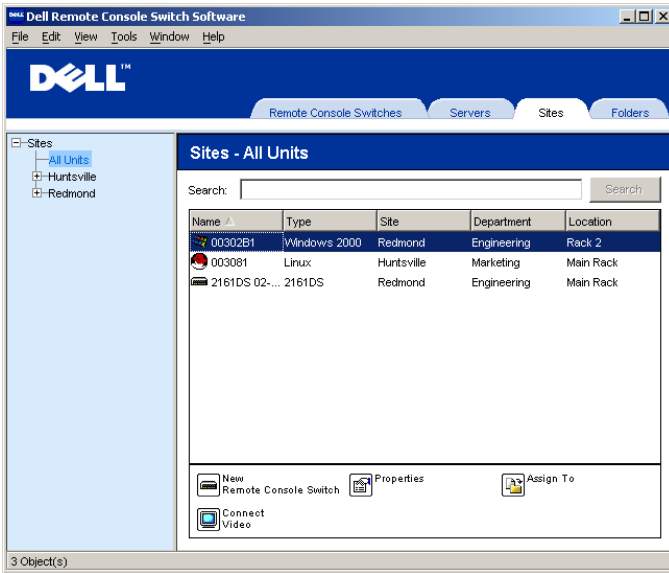
システムの編成

RCSソフトウェアでSitesおよびFoldersの表示タブを使用すると、Remote Console Switchとサーバーをカスタム・グループ別に編成し、管理できます。サイトの整理方法はサーバーが配置されている場所に基づき、コラムヘッダーである**サイトと部門**として表示されますが、これらはニーズに合わせてカスタマイズできます。「カスタム・フィールド名の変更」(ページ53)を参照してください。フォルダを使用することで、個々のサーバー用に、カスタマイズした編成システムを作成することができます。例えば、重要なサーバーやリモートサーバー用のフォルダを作成することができます。

コラム・ヘッダーをクリックすると、**ユニット選択**リストの順番や分類別を変更できます。コラムヘッダーの上向き矢印は、リストがこのフィールド名で昇順に配列されていることを示します。下向き矢印は、リストがこのフィールド名で降順に配列されていることを示します。

コラムヘッダーはカスタマイズすることができます。図 3.10は、フィールド名のデフォルト値の使い方の例を示しています。これらは組織に合わせて変更できます。図 3.11に、カスタマイズされたフィールド名の例を示します。

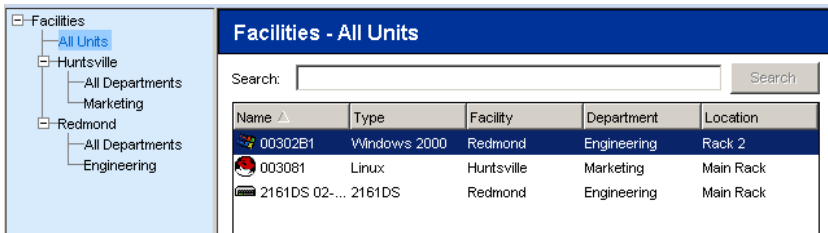
図 3.10: Sitesのビュー選択タブが選択された状態



カスタム・フィールド名の変更

カスタム・フィールド名を使用すると、ソフトウェアの**グループ選択**ペインや**ユニット選択**ペインに表示される**Site**、**Department**、および**Location**の各コラム・ヘッダー名を変更できます。これにより、ユーザーが使いやすい形でRemote Console Switchとサーバーのグループ分けができるようになります。**Department**フィールドは、**Site**のサブセットです。これらのフィールド名をカスタマイズする場合は、この階層構造に留意して行ってください。

図 3.11: 変更したカスタム・フィールドの例



新しいサイト、部門、またはロケーションを作成するには:

- 1 Explorer メニューから**View** → **Properties**を順に選択します。
-または-
Propertiesタスク・ボタンをクリックします。**Properties**ダイアログ・ボックスが表示されます。
- 2 **General**タブをクリックし、ドロップダウン・リストから**Site**、**Department**、または**Location**を選択します。名前がドロップダウン・リストにない場合は、テキスト・フィールドに希望する名前を入力します。名前は1～32文字の範囲で指定します。名前にはキーボードから入力できる文字を任意に組み合わせて使用できます。また大文字と小文字の区別はありません。スペースの使用は中間では構いませんが、最初と最後には使用できません。既存名と同一の名称は使用できません。
- 3 **OK**をクリックします。新しいサイト、部門またはロケーションが**グループ選択**ペインに表示されます。

フォルダの作成

新しいフォルダを作成するには:

- 1 **Folders**の**ビュー選択**タブを選択します。
- 2 **Folders**ノード上でクリックし、**File** → **New** → **Folder**を順に選択します。
-または-
Foldersノードを右クリックし、**New Folder**を選択します。**New Folder**ダイアログ・ボックスが表示されます。
- 3 フォルダ名を1～32文字の範囲で指定します。フォルダ名にはキーボードから入力できる文字を任意に組み合わせて使用できます。また大文字と小文字の区別はありません。スペースの使用は中間では構いませんが、最初と最後には使用できません。同じレベルでは同一のフォルダ名は使用できませんが、異なるレベル間では使用可能です。
- 4 **OK**をクリックします。新しいフォルダが**グループ選択**ペインに表示されます。

ユニットのサイト、ロケーション、またはフォルダへの割当

ソフトウェアで、**サイト**、**部門**、**ロケーション**または**フォルダ**にRemote Console Switchまたはサーバーを割り当てることができます。このメニュー項目は、**ユニット選択**ペイン内で単一のRemote Console Switchまたはサーバーが選択されているときのみ有効となります。これらのカスタム・ターゲットは、**General Properties** ダイアログ・ボックスで定義されています。

ユニットをサイト、ロケーション、またはフォルダへ割り当てるには:

- 1 **ユニット選択**ペインでサーバーを選択します。
- 2 Explorerメニューから**Edit** → **Assign**を順に選択します。
-または-
Assign Toタスク・ボタンをクリックします。
-または-
ユニットを右クリックして**Assign To**を選択します。**Assign To**ダイアログ・ボックスが表示されます。
- 3 サイト、ロケーションまたはフォルダ・カテゴリーをドロップダウン・リストから選択します。
- 4 選択されたカテゴリーの範囲内で、使用可能なターゲットのリストから、ユニットを割り当てられるターゲットを選択します。サイト、ロケーション、またはフォルダがローカル・データベース内で定義されていない場合には、このリストは空欄になります。
- 5 **OK**をクリックして割り当てを保存します。
-または-
Cancelをクリックすると、変更を保存しないで終了します。

ユニットをサイト、部門、ロケーション、またはフォルダにドラッグ・アンド・ドロップするには:

- 1 ソフトウェアの**ユニット**リスト内でユニットをクリックし、マウスをそのまま保持します。

- 2 このユニットを、**グループ選択**ペインのツリー表示内にあるノードにドラッグします。
- 3 マウス・ボタンを放します。そのノードをクリックすると、この項目が**ユニットリスト**に表示されます。



注: ユニットは、すべての部門、すべてのユニット、またはサイトのルート・ノードには移動できません。ユニットは一度に一つずつしか移動できません。

削除および名前の変更

削除機能は、ソフトウェアの**グループ選択**ペインと**ユニット選択**ペインでの現在の選択内容に基づく状況依存型の機能です。ユニット・リストのユニットを選択して削除すると、**ユニット**はローカル・データベースから削除されます。**グループ選択**ペインのツリー表示で項目を選択し削除する場合、**サーバーの種類**、**サイト**、**部門**、および**フォルダ**も削除されます。ただし、いずれの操作を行っても、ユニットはローカル・データベースからは削除されません。

名前の変更機能も状況依存型です。**ユニットリスト**からRemote Console Switchまたはサーバーを選択し、名前を変更することができます。**グループ選択**ペインのツリー表示でも、サーバーの種類、サイト、部門およびフォルダ名を選択して名前を変更することができます。

Remote Console Switchまたはサーバーを削除するには:

- 1 **ユニット選択**ペインから削除するユニットを選択します。
- 2 **Edit** → **Delete**の順に選択します。

-または-

キーボードのDelキーを押します。削除するユニットの数の確認を求めるダイアログ・ボックスが現れます。Remote Console Switchを削除する場合、ダイアログ・ボックスに**Delete Associated Servers** チェックボックスが表示されます。必要に応じ、チェックボックスをクリックして有効／無効にします。

- 3 **Yes**をクリックして削除を確認します。設定によっては、この他にも別のメッセージが表示される場合があります。該当する場合は対応してください。Remote Console Switchまたはサーバーが削除されます。

-または-

Noをクリックしてキャンセルします。

サーバーの種類、サイト、部門またはフォルダを削除するには：

- 1 **グループ選択**ペインから削除するサーバー・タイプ、サイト、部門またはフォルダを選択します。
- 2 **Edit → Delete**の順に選択します。
-または-
キーボードのDelキーを押します。削除されるユニットの数の確認を求め
るダイアログ・ボックスが現れます。
- 3 **Yes**をクリックして削除を確認します。設定によっては、この他にも別のメッ
セージが表示される場合があります。該当する場合は対応してください。アイ
テムが削除されます。

-または-

Noをクリックしてキャンセルします。

ユニット、サイト、部門またはフォルダの名前を変更するには：

- 1 RCSソフトウェアで、**グループ選択**ペインから削除するサーバー・タイプ、サイ
ト、部門またはフォルダを選択します。
- 2 **Edit → Rename**の順に選択します。**Rename**ダイアログ・ボックスが表示され
ます。
- 3 フォルダ名を1～32文字の範囲で指定します。名前にはキーボードから入力
できる文字を任意に組み合わせで使用できます。また大文字と小文字の区別
はありません。スペースの使用は中間では構いませんが、最初と最後には使
用できません。同一の名前は、次の2つの例外を除いては使用できません。同
一の部門名は異なるサイト間であれば使用可能であり、また同一フォルダ名
は異なるレベルの間であれば使用可能です。
- 4 **OK**をクリックして、新しい名前を保存します。

Explorerウィンドウのカスタマイズ

RCSソフトウェアのExplorerウィンドウのサイズはいつでも変更可能です。アプリ
ケーションを起動させるたびに、Explorerウィンドウはデフォルトのサイズと位置で

開きます。アプリケーション実行中に手動でウィンドウ・サイズを変更することはできませんが、その情報は保存されません。つまり、Explorerを次回起動させる際に、再びデフォルトのサイズと位置で開くことになります。

グループ選択ペインと**ユニット選択**ペインは、画面を縦に走る分割ペイン・ディバイダーにより分割されています。ディバイダーを左右に移動すると、**グループ選択**ペインと**ユニット選択**ペインの表示領域を変更できます。Explorerを起動するたびに、ディバイダーはデフォルト位置に戻ります。

スタートアップ時の指定表示の変更

スタートアップ時のオプションの**Selected**ビューの下で**Default**がチェックされている場合、表示内容はExplorerにより決定されます。1つまたは複数のサーバーが定義されている場合は、デフォルトで**Servers**タブが表示されます。これ以外の場合は、**Remote Console Switches**タブが表示されます。

Defaultがチェックされていない場合、Explorerは、チェックボックスの下に示されるドロップダウン・リストで選択された表示内容を表示します。ドロップダウン・リストには、**Remote Console Switches**、**Servers**、**Sites**、および**Folders**の値が含まれます。ドロップダウン・リストは、チェックボックスが無効の場合にのみ有効です。

スタートアップ時の指定表示方法を変更するには：

- 1 RGSソフトウェアのExplorerメニューから、**Tools** → **Options**を順に選択します。**Options**ダイアログ・ボックスが表示されます。
- 2 ドロップダウン・リストから、**Remote Console Switches**、**Servers**、**Sites**、または**Folders**のいずれかを選択します。
- 3 **OK**をクリックして新しいスタートアップ・ビューを保存します。
-または-
Cancelをクリックすると、変更を保存しないで終了します。

デフォルト・ブラウザの変更

ブラウザ・ウィンドウでサーバーURLを表示する際にどのブラウザを起動するかを指定することができます。使用システムのデフォルト・ブラウザを使用するよう選択するか、あるいはこのサーバーで起動させる特定のブラウザを選択します。

デフォルト・ブラウザを変更するには：

- 1 Explorerメニューから**Tools** → **Options**を順に選択します。**Options**ダイアログ・ボックスが表示されます。
- 2 **Launch Default Browser**チェックボックスをクリックして無効にします。**Browse**ボタンが有効になります。
- 3 **Browse**ボタンをクリックし、ブラウザへ移動します。
- 4 **OK**をクリックして新しいブラウザの選択を保存します。
-または-
Cancelをクリックすると、変更を保存しないで終了します。

ローカル・データベースの管理

このソフトウェアを実行している各クライアント・ワークステーションには、使用ユニットに関して入力された情報を記録するローカル・データベースが含まれています。複数のクライアント・ワークステーションがある場合には、一台のステーションを設定した後に、そのデータベースのコピーを保存し、それを他のステーションに読み込むと、各ステーションで再設定を行う手間を省くことができます。また、そのデータベースをエクスポートして、別のアプリケーションで使用することもできます。

データベースの保存

RCSソフトウェアでは、ローカル・データベースのコピーを保存できます。保存されたデータベースは、後に、データベースが作成された同じコンピューターに戻して読み込むか、または別のクライアント・ワークステーションに読み込むことができます。保存されたデータベースは、単一のZipファイルに圧縮収納できます。

データベースの保存実行中は、これ以外のすべてのアクティビティは実行できず、その他すべてのウィンドウを閉じる必要があります。他のウィンドウが開いている場合にはメッセージが表示され、開いているウィンドウをすべて閉じてデータベースの保存を続行するか、またはデータベースの保存処理をキャンセルするかを選択を求められます。

データベースを保存するには:

- 1 RCS Explorerのメニューから、**File** → **Database** → **Save**を順に選択します。**Database Save**ダイアログ・ボックスが表示されます。
- 2 保存するデータベースを選択するには:
- 3 ファイル名を入力して、ファイルを保存する場所を参照します。
- 4 **Save**をクリックします。保存中は進行状態を示すバーが表示されます。完了するとメッセージが表示され、保存が正しく実行されてメイン・ウィンドウに戻ることを示されます。

データベースの読み込み

この機能により、前に保存したデータベースを読み込むことができます。すべてのアクティビティを停止し、他のすべてのウィンドウを閉じる必要があります。他のウィンドウが開いている場合にはメッセージが表示され、開いているウィンドウをすべて閉じてデータベースの読み込みを続行するか、またはデータベースの読み込み処理をキャンセルするかの選択を求められます。

データベースを読み込むには:

- 1 RCS Explorerのメニューから、**File** → **Database** → **Load**を順に選択します。**Database Load**ダイアログ・ボックスが表示されます。
- 2 読み込むデータベースを参照して選択します。
- 3 **Load**をクリックします。読み込み中は進行状態を示すバーが表示されます。完了すると、読み込みが正常に終了したことを知らせるメッセージが表示され、メイン・ウィンドウに戻ります。

データベースのエクスポート

この機能を使うと、各フィールドをローカル・データベースからASCIIカンマ区切り形式ファイル(CSV)またはタブ区切り形式ファイル(TSV)にエクスポートすることができます。エクスポートされるのは次のデータベース・フィールドです。

Remote Console Switchフラグ

種類

名前

アドレス

サイト

部門

場所

説明

連絡先名

連絡先電話番号

コメント

ブラウザURL

Telnetポート



注: Addressフィールドは、Remote Console Switchにのみ適用され、Browser URLフィールドはサーバーのみに適用されます。エクスポートされたファイルで、サーバーの場合は、Addressフィールド・データが空になり、Remote Console Switchの場合は、Browser URLフィールド・データが空になります。

エクスポートされたファイルの第一行目には、フィールド・データの列名が表示されます。次行以降の各行には、Remote Console Switchまたはサーバーのフィールド・データが表示されます。このファイルには、ローカル・データベースで定義される各Remote Console Switchおよびサーバーについての情報を有する行が含まれています。

データベースをエクスポートするには:

- 1 RCS Explorerのメニューから、**File** → **Database** → **Export**を順に選択します。**Database Export**ダイアログ・ボックスが表示されます。
- 2 ファイル名を入力し、エクスポートされたファイルを保存する場所へ移動します。
- 3 エクスポートする形式の種類を、**Files of Type**ドロップダウン・リストから選択します。
- 4 **Export**をクリックします。エクスポート中は進行状態を示すバーが表示されます。完了すると、エクスポートが正しく実行されたことを知らせるメッセージが表示され、メイン・ウィンドウに戻ります。

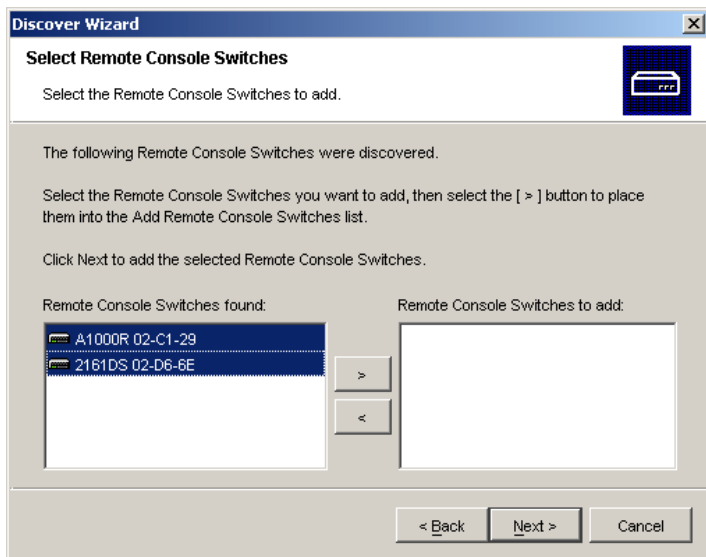
ビューアの使用法

Remote Console Switchシステム内のサーバーには、ビューアを使用して接続できます。このビューアから、サーバーのキーボード、モニター、マウス機能を完全にコントロールできます。また、個々のサーバーのサムネール・ビューアでの表示を有効にすることで、カスタマイズしたサーバー・リストを使用してスキャンすることもできます。このビューアには一連のサムネール・フレームが表示され、それぞれのフレームに、サーバーの画面を小さくスケールした非対話式バージョンの画像が表示されます。詳細については、「スキャン・モードを使用した複数サーバーの表示」(ページ79)を参照してください。

RCSソフトウェアからのサーバーへのアクセス

RCSソフトウェアのServersタブには、データベース内で定義されているサーバーのリストが表示されます。**グループ選択**ペインが表示され、データベースで定義されているサーバーの固有な種類がすべてツリー表示で表示されます。**グループ選択**ペインは、複数のサーバー・タイプが定義されている場合にのみ表示されます。**All Servers**、またはフォルダのどちらかをクリックして、特定タイプのすべてのサーバーを表示できます。サーバーを選択して**Connect Video**タスク・ボタンをクリックすると、**ビューア**が起動します。

図 4.1: RCSソフトウェア – Serversタブ



サーバーにアクセスするには:

- 1 Explorerで**Servers**タブをクリックします。
- 2 **ユニット選択**ペインでサーバーを選択します。
- 3 **Connect Video**タスク・ボタンをクリックします。

-または-

サーバーを右クリックします。ポップアップ・メニューが表示され
ます。**Connect Video**を選択します。

-または-

サーバー名をダブルクリックします。

-または-

Enterキーを押します。新しいウィンドウが開いて**ビューア**が起動します。

システム内でサーバーを検索するには:

- 1 **Servers**タブをクリックして、検索テキストボックス内にカーソルを置きます。

- 2 検索情報を入力します。これは、サーバー名、あるいは別の**ユニット選択**リストのヘディングである**Type**や**Location**として入力した情報でも構いません。
- 3 **Search**ボタンをクリックします。結果は**ユニット**リストに表示されます。
- 4 検索の結果を参照します。

—または—

Clear Resultsボタンをクリックし、リスト全体をもう一度表示します。

閲覧中のサーバーとのインターアクション

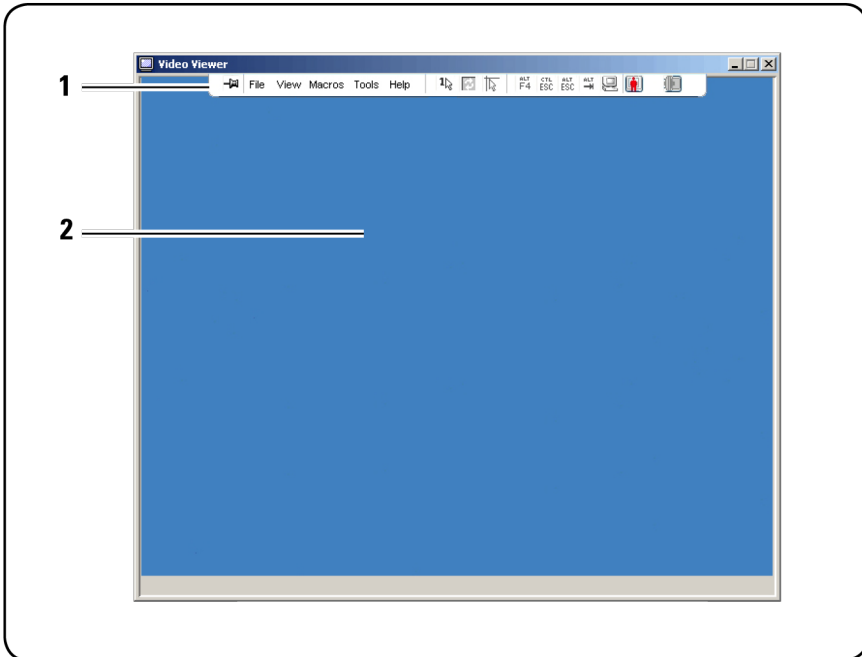
サーバーへの接続がいったん確立されると、自分の画面にサーバーのデスクトップ・ウィンドウが表示されるようになります。これは別のウィンドウとして表示されます。ローカルのカーソルとサーバーのカーソルの2つが表示されます。一緒に移動しない場合に位置合わせを行ったり、飛び跳ねるような場合にはビデオを調整する必要がでてくる場合があります。このウィンドウから、あたかもサーバーの前に着座しているかのように、このサーバーの通常機能全般にアクセスすることができます。また、特定のマクロ・コマンドをサーバーに送信するなどの、**ビューア**固有のタスクも実行できます。



注: リモート・ビデオ・セッション中にマウスの反応が遅くなった場合は、対象デバイスのオペレーティング・システムでマウスの加速をオフにし、マウスの速度を50%に設定してください。

ビューア・ウィンドウの機能

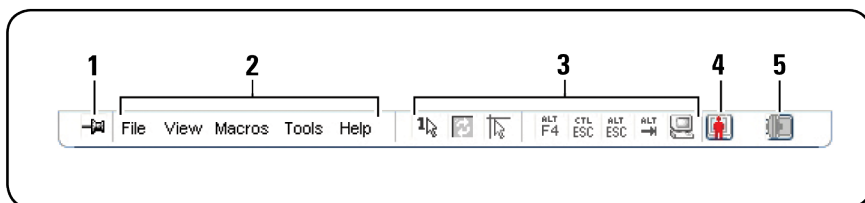
図 4.2: ビューア・ウィンドウ



- 1 メニュー・バー: ビューアの機能の多くにアクセスできます。
- 2 アクセスしたサーバーのデスクトップ: このウィンドウからサーバーと対話します。



ビューアのメニュー・バー

図 4.3: ビューアのメニュー・バー



- 1 **画紙**: クリックするとメニュー・バーが所定の位置に固定されます。固定することにより、メニュー・バーからマウス・カーソルを移動した後もメニュー・バーが非表示になりません。
- 2 **メニュー・オプション**: メニューからビューアで利用できる機能にアクセスします。
- 3 **ツールバー・ボタン**: ツール・バーには最大10個のボタンを追加できます。これらのボタンを使用すると、定義済みの機能およびキーボードのマクロに簡単にアクセスできます。デフォルトでは、ローカル・カーソルの位置合わせ、画像の更新、およびシングル・カーソル・モードの各ボタンが表示されます。
- 4 **接続ステータス・インジケータ**: 接続ステータス・インジケータに、ユーザーがこのサーバーのアプライアンスにどのように接続されているかが表示されます。詳細については、「セッション共有オプション」(ページ87)を参照してください。

表 4.1: 接続ステータス・インジケータ

接続ステータス・インジケータ: 共有モード	
	エクスクルーシブ・モード
	アクティブな接続(通常、非共有、非エクスクルーシブ・セッション)

接続ステータス・インジケータ: 共有モード



能動共有 (プライマリ・ユーザー)



能動共有 (セカンダリ・ユーザー)



受動共有



ステルス・モード

スキャン

- 5 スマート・カードのステータス・インジケータ: スマート・カードの状態は、ビデオ・ビューアのツールバーの右端にあるスマート・カード・アイコンに表示されます。

表 4.2: スマート・カードのステータス・インジケータ

アイコン	説明
	スマート・カードがスマート・カード・リーダーに挿入されていないか、またはスマート・カード・リーダーが接続されていません。
	スマート・カードはスマート・カード・リーダーに入っていますが、マッピングされていません。
	スマート・カードはマッピングされています。

ビューアの調整

各ユーザーの要件に合わせてビューア設定を調整できます。この調整には、画面の解像度やツールバーの設定、キーボードのマクロ設定などが含まれます。

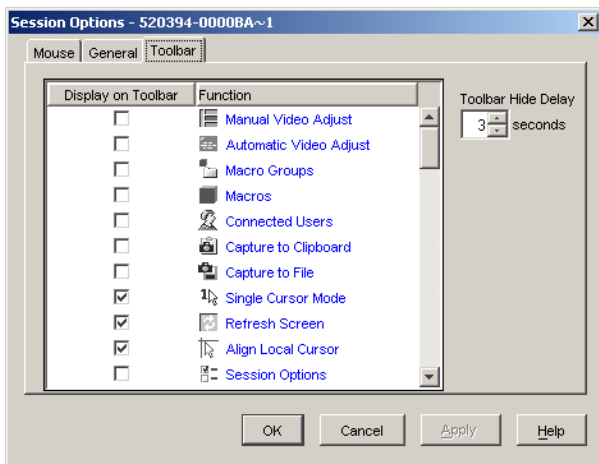
ビューア・ツールバーの調整

ツール・バーには最大10個のボタンを追加できます。これらのボタンを使用すると、定義済みの機能およびキーボードのマクロに簡単にアクセスできます。デフォルトでは、ローカル・カーソルの位置合わせ、画像の更新、およびシングル・カーソル・モードの各ボタンが表示されます。

ツールバーにボタンを追加するには:

- 1 ビューアのToolsメニューから**Session Options**を選択します。Session Options ツールバーが表示されます。
- 2 **Toolbar**タブをクリックします。
- 3 ビューアのツールバーに追加する項目をクリックして選択します。
- 4 **OK**をクリックして変更内容を受け入れ、ビューアのメイン・ウィンドウに戻ります。

図 4.4: Session Optionsダイアログ・ボックスのToolbarタブ



ツールバーの非表示遅延時間の設定

Thumbtackボタンがクリックされていないければ、マウス・カーソルを離れた後、ツールバーは非表示になります。マウス・カーソルを離してからツールバーが消えるま

での時間は、**Toolbar Hide Delay**の時間を調整することで変更できます。

Toolbar Hide Delayの時間を変更するには：

- 1 **ビューアのToolsメニューからSession Options**を選択します。Session Options ツールバーが表示されます。
- 2 **Toolbar**タブをクリックします。
- 3 **Toolbar Hide Delay**フィールドに、マウス・カーソルを離れた後にツールバーを表示したい秒数を入力します。
-または-
上と下のボタンをクリックして、マウス・カーソルを離れた後にツールバーを表示したい秒数を増減します。
- 4 **OK**をクリックして変更した内容を受け入れ、**ビューアのメイン・ウィンドウ**に戻ります。

ビューアの拡大と更新

デフォルトでは、**ビューア**の表示を調整するための3つのボタンが**ビューア**のツールバーに表示されています。最初のボタンは、**ビューア**を**シングル・カーソル・モード**に設定する場合に使用します。この設定により、サーバー上と同じように**ビューア**でマウスを使用できます。**ビューア**が**シングル・カーソル・モード**に設定されている場合、**ローカル・カーソル**は表示されません。

 **注:** **シングル・カーソル・モード**は、Windowsプラットフォーム上でのみ有効です。

2番目のボタンはビデオを更新するために、3番目のボタンはマウス・カーソルの位置合わせに使用します。

図 4.5: **ビューア**のツールバー — 表示調整ボタン



ビューアを**シングル・カーソル・モード**に設定するには：

ビューアのツールバーで、**シングル・カーソル・モード**ボタンをクリックします。

画面を更新するには：

ビューアのツールバー上の**画像の更新**ボタンをクリックします。

-または-

ビューアのメニューから、**View** → **Refresh**を順に選択します。デジタル化されたビデオ・イメージは完全に再生成されます。

マウスのカーソルの位置を合わせるには:

ビューアのツールバー上の**ローカル・カーソルの位置合わせ**ボタンをクリックします。ローカル・カーソルの位置がリモート・サーバー上のカーソルと揃います。

フルスクリーン・モードにするには:

ビューアの右上隅の**最大化**ボタンをクリックします。

-または-

ビューアのメニューから**View** → **Full Screen**を選択します。デスクトップ・ウィンドウは表示されなくなり、アクセスされたサーバーのデスクトップだけが見えるようになります。画面のサイズは、最高で1600 x 1200(標準)と1680 x 1050(ワイドスクリーン)の解像度まで変更されます。モニターのデスクトップ解像度がこれより優れている場合は、フルスクリーンのイメージが黒の背景で縁取られます。浮動ツールバーが表示されます。

フルスクリーン・モードを終了するには:

Escキーを押してフルスクリーン・モードを終了し、デスクトップ・ウィンドウに戻ります。

ビューアの解像度の調整

Auto Scaleが有効に設定されている場合、セッション中に**ビューア**のウィンドウのサイズが変更されるのに従い、自動的に表示が調整されます。共有を使用してチャンネルにアクセスすると、そのチャンネルのプライマリ・ユーザーが選択した入力解像度に合わせて表示が調整されます。これにより、プライマリ・ユーザーが影響を受けずに済みます。解像度がセッション中に変更されると、表示が自動的に調整されます。

Full Scaleが選択されている場合、ビューアはサーバーの画面解像度に調整され、最大1600 x 1200(標準)および1680 x 1050(ワイドスクリーン)まで画面サイズを拡大します。

ビューアのウィンドウのサイズを調整するには:

メニュー・バーからView → Scaling → Auto Scaleを選択して、サーバーの画像のサイズを自動的に調整します。

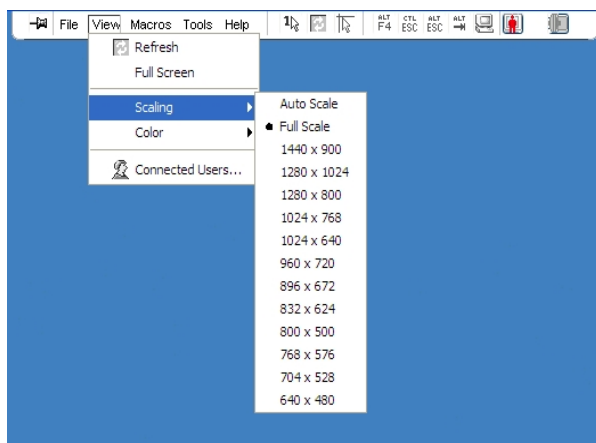
-または-

メニュー・バーからView → Scaling → Full Scaleを選択します。

-または-

Scalingサブメニューから画面の解像度を選択します。

図 4.6: ビューアのスケール




ビデオ画質の調整

ビューアは自動/手動のビデオ調整機能を備えています。一般に、自動ビデオ調整を選択した場合には、調整可能な範囲で最高のビデオ画像に最適化されます。しかしながら、特定のニーズに合わせてビデオを変更することも可能です。大きく調整する場合は、スライダー・バーを使用します。プラス(+)とマイナス(-)のボタ

ンを使って微調整できます。手動でのビデオ調整の詳細については、「図 4.7」を参照してください。

色の深度の調整

 **注:** Colorコマンドは、プライマリ・ユーザーのみが使用できます。このコマンドはセッションを共有するプライマリ以外のユーザーは使用できません。

 **注:** Session Optionsダイアログ・ボックスでBackground Refreshが有効になっている場合は、色の解像度が自動的にBest Color Availableにセットされ、変更はできません。

Colorサブメニューを使用すると、デジタル画像を圧縮する際の色の解像度を設定できます。Remote Console Switchは、Dambrockasビデオ圧縮(DVC)アルゴリズムをサポートしています。このアルゴリズムにより、RCSソフトウェアのユーザーは、リモート・セッション・ウィンドウで表示可能な色の数を調整できます。表示色数を増やすと最高の忠実度が得られ、色数を減らすとネットワーク上で転送されるデータ量が減少します。

ビューアのウィンドウはBest Color Available(更新間隔が長い)、Best Compression(更新間隔が最も短い)、またはBest ColorとBest Compressionとの組み合わせの使用、あるいはGrayscaleで表示できます。

個々のポートとチャンネルの色の解像度は、Remote SessionウィンドウでView → Colorの順にコマンドを選択して指定できます。この設定はポート別およびチャンネル別に保存されます。

色の解像度を設定するには:

ビューアのメニューからColorを選択し、Colorサブメニューから色の解像度を選択します。

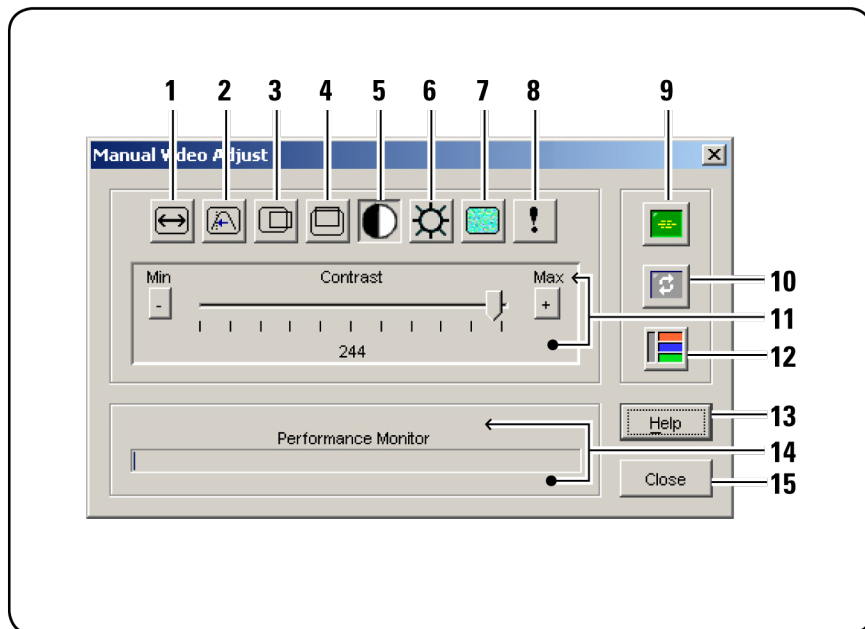
ビューアウィンドウのビデオ画質を手動で調整するには:


- 1 ビューアのメニューでTools → Manual Video Adjustを順に選択します。Manual Video Adjustダイアログ・ボックスが表示されます。
- 2 調整する機能のアイコンをクリックします。
- 3 スライダー・バーを移動するか、またはマイナス(-)またはプラス(+)ボタンをクリックすることで、押されている各アイコンに対応するパラメーターを調整します。調整は直ちにビューアのウィンドウに反映されます。

- 4 完了したら、CloseをクリックしてManual Video Adjustダイアログ・ボックスを閉じます。

手動ビデオ調整ダイアログボックスのオプション

図 4.7: Manual Video Adjustダイアログ・ボックス



 注: OBWIを使用してビューアを起動した場合は、上記のようなManual Video Adjustダイアログ・ボックスが表示されます。RCSソフトウェアを使用してビューアを起動した場合は、Closeボタンの上にHelpボタンも表示されます。

- 1 画像キャプチャーの幅
- 2 ピクセル・サンプリング微調整
- 3 画像キャプチャーの水平位置
- 4 画像キャプチャーの垂直位置

- 5 コントラスト
- 6 明るさ
- 7 ノイズのスレッシュホールド
- 8 スレッシュホールド優先順位
- 9 自動ビデオ調整
- 10 画像の更新
- 11 調整バー
- 12 ビデオ・テスト・パターン
- 13 Help
- 14 Performance Monitor
- 15 Closeボックス

リモート・ビデオ・セッションの変色抑制

リモート・ビデオ・セッションを設定する場合、ネットワーク状態が原因となるピクセルの色落ちが発生することがあります。この状況は、背景が純色の場合に最も多く起こります。これは黒い背景を使用することで最小限に抑えられます。カラーの背景を使用した場合、画面上のピクセルの少数が色落ちするか白くなります。

リモート・ビデオのピクセルの色落ちを最小限に抑えるには:

- 1 ビューアのメニューで**Tools** → **Manual Video Adjust**を順に選択します。**Manual Video Adjust**ダイアログ・ボックスが表示されます。
- 2 コントラストまたは明るさを選択します。
- 3 画質が改善されるまで、コントラストと明るさを少しずつ調整します。
- 4 インクリメンタルな微調整には、**Tools** → **Manual Video Adjust**のノイズのスレッシュホールド設定も使用できます。



注: ノイズのスレッシュホールドをゼロまで下げると、ビデオが継続的に更新され、ネットワーク利用率が上がり、ビデオのちらつきが起こります。Dellでは、ノイズのスレッシュホールドを最大に設定し、移動するマウス・カーソルの下のピクセルの色が復元される間も、システムの性能が効率よく活用されるようにすることを推奨します。



注: ノイズのスレッシュホールドを調整する場合、大きく調整する場合はスライダー・バーを、微調整する場合はスライダー・バーの両端のプラス(+)ボタンとマイナス(-)ボタンを使用します。

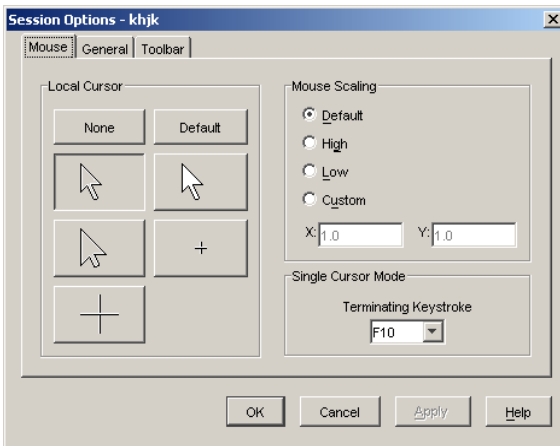
画面の背景色表示の改善

写真画像や多色使いのグラデーション背景が選択されているターゲット・サーバーを表示している場合、色表示が途切れることがあります。最適な画質ならびに性能が得られるよう、オペレーティング・システムの背景色には純色を選択するようお勧めしています。

マウスの調整

ビューアでは、マウス・カーソルの5つの異なるオプションを選択し、マウスのスケールを設定し、正しくトラッキングしなくなったマウスを再同期することができます。Dellでは、**Local Cursor**オプションを**None**に設定して、ローカル・カーソルをオフにすることを推奨します。こうすると、画面上にはリモート・カーソル一つだけが残ることになり、操作が容易になります。

図 4.8: ビューアのマウスのSession Optionsダイアログ・ボックス



マウス・スケーリングの設定

マウス・スケーリングの設定は、事前に設定されたマウス・スケーリング設定のオプション3種から選択するか、またはユーザー自身のカスタム・スケーリングを設定することもできます。事前に設定されている3つのオプションには、**Default** (1:1)、**High** (2:1)、**Low** (1:2)があります。1:1のスケーリング率では、デスクトップ・ウィンドウでのマウスのすべての動きは、実際の動きと同等の動きとしてサーバーに送られます。2:1のスケーリングでは、マウスの動きは2倍速の動きとして送られます。1:2のスケーリングでは、2分の1の速度になります。

マウス・スケーリングをカスタム設定するには:

- 1 ビューアのメニューで**Tools** → **Session Options**を順に選択します。**Session Options**ダイアログ・ボックスが表示されます。
- 2 **Mouse**タブをクリックします。
- 3 **Custom** ボタンをクリックします。Xフィールド、Yフィールドが有効になります。
- 4 必要なマウスのスケーリング値を、XフィールドとYフィールドに入力します。マウスの各入力に対し、マウスの動きは、XとYの各スケール係数を乗じた動きとなります。有効な入力範囲は、0.25~3.00です。

マウスの軌跡の最小化

リモート・ビデオ・セッションの間、画面上をマウスが移動したとき、一部のピクセルが色落ちした状態で残ります。この状態はマウスの軌跡と呼ばれ、ネットワーク・レベルの変動、および異なる環境でのその他のノイズが原因で生じます。マウスの軌跡を最小限に抑えるには、**Manual Video Adjust**ダイアログ・ボックスの**Noise Threshold**の値を低くする必要があります。

ノイズのスレッシユホールドを下げるには:

- 1 ビューアのメニューで**Tools** → **Manual Video Adjust**を順に選択します。**Manual Video Adjust**ダイアログ・ボックスが表示されます。
- 2 調整する機能の**Noise Adjust Threshold**アイコンをクリックします。
- 3 マウスを使用して、スライダー・バーをスケールの中央に移動し、ゼロに下げます。

- 4 スライダー・バーの両端の**プラス(+)** ボタンと**マイナス(-)** ボタンを使用して、ノイズのスレッシュホールドをゼロの真上に微調整します。



注: ノイズのスレッシュホールドをゼロに設定すると、ビデオが継続的に更新されるため、ネットワーク利用率が上がり、ビデオのちらつきが起こります。ノイズのスレッシュホールドは最大に設定し、移動するマウス・カーソルの下のピクセルの色が復元される間も、システム性能を効率化することをお薦めしています。



注: ノイズのスレッシュホールドを調整する場合、大きく調整する場合はスライダー・バーを、微調整する場合はスライダー・バーの両端の**プラス(+)** ボタンと**マイナス(-)** ボタンを使用します。

マウスの性能の改善

マウスの応答が遅かったり、リモート・ビデオ・セッションでマウス・ポインタが同期を外れる場合は、ターゲット・サーバーのオペレーティング・システムでマウスの加速を無効化して対処できます。

Microsoft Windows:

- 1 マウスの加速をオフにします。
- 2 マウスの速度を、スライダー・バーの真ん中に調整します。



注: 具体的な手順については、Windowsオペレーティング・システム付属のマニュアルを参照してください。

Red Hat Linux:

- 1 **Desktop Controls**から**Mouse**設定を選択します。
- 2 **Acceleration**を1.0に設定します。
- 3 マウスを再同期する場合は、ビューアの**Align Local Cursor/Mouse**ボタンを使用します。

マウス・カーソルのちらつきの抑制

RCSソフトウェア・クライアント・マシンのビデオ・ドライバーがDirectDraw®をサポートしない場合に、RCSソフトウェアのDirectDrawオプションが有効になっていると、画面上でマウス・カーソルのちらつきが起こります。RCSソフトウェアの出荷時デフォルトでは、DirectDrawは無効になっています。クライアント・システムの

ビデオ・ドライバーがDirectDrawをサポートしており、性能を向上させたい場合、次の手順に従ってDirectDrawを有効にします。

DirectDrawを有効または無効にするには：

- 1 Explorerウィンドウで、**Tools** → **Options**を選択します。
- 2 **DirectDraw**チェック・ボックスをクリックして有効または無効にします。
- 3 **OK**をクリックします。
- 4 RCSソフトウェアを再起動します。

スキャン・モードを使用した複数サーバーの表示

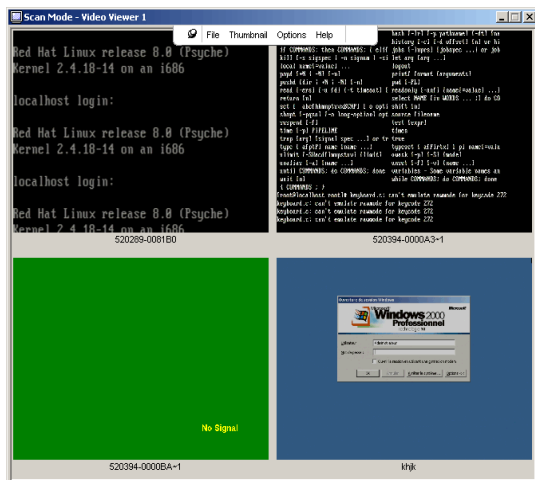
ビューアでは、スキャン・モードのサムネール・ビューアにより複数のサーバーを同時に表示することができます。これは一連のサムネール・フレームの表示で、各フレームはサーバー画像の縮小／非インタラクティブ版になっています。各サムネールの下には、ステータス・インジケータとともにサーバー名が表示されます。

サーバーのスキャン

サムネールビューアにより、最高16台のサーバーのスキャン・シーケンスをセットアップして、使用中のサーバーをモニターできます。スキャン・モードでは、サムネール画像が一つずつ移動します。このとき、サーバーにログインした後、(**View Time Per Server**で) ユーザーが指定した時間だけ最新のサーバー画像が表示され、その後そのサーバーからログアウトして、次のサムネール画像に移動します。また、サムネール間のスキャン遅延を指定することもできます(**Time Between Servers**を使用)。この遅延の間は、他のサーバーにログインはしないものの、スキャン・シーケンスに含まれるすべてのサーバーの最後のサムネール画像が表示されます。

各フレーム表示の下の表示ライトに、サーバーのステータスが表示されます。サムネールのデフォルト・サイズはスキャンリスト内のサーバー数によって異なります。

図 4.9: ビューアでのサムネール・ビューア

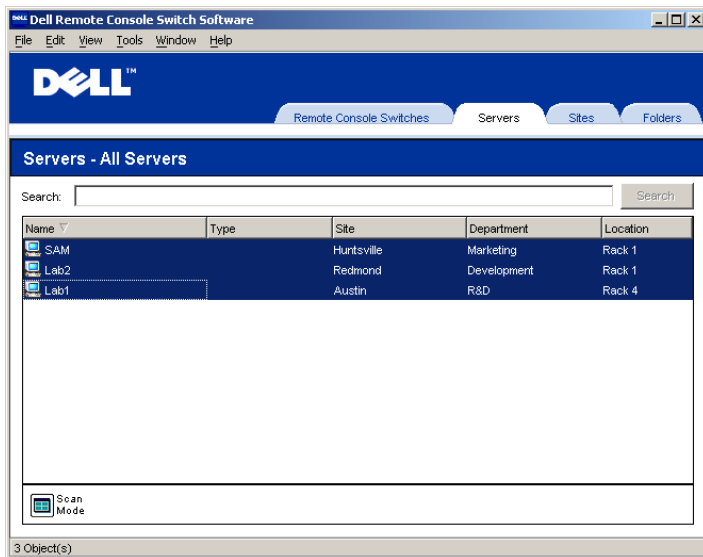


スキャン・モードは、アクティブな接続よりも優先順位が低くなります。サーバーとインタラクティブ・セッションを行っている場合、そのサーバーはスキャン・シーケンス内で飛ばされ、スキャン・モードは次のサーバーへ進むこととなります。ログインのエラー・メッセージは表示されません。インタラクティブ・セッションが終了すると、サムネールが再びスキャン・シーケンスに含まれます。別のユーザーがサーバーとのアクティブな接続を確立している場合、そのサーバーはスキップされ、フレームの下の表示灯に赤い「X」文字が表示されます。

RCSソフトウェアは、複数のRemote Console Switchに接続されているサーバーをスキャンできます。

RCSソフトウェアからのスキャン・モードへのアクセス

図 4.10: RCSソフトウェア - サーバーのスキャン



RCSソフトウェアでスキャン・モードにアクセスするには

- 1 Explorerで、**Remote Console Switch**、**Servers**、**Sites**、**Folders**のいずれかのタブを選択します。
- 2 Shiftキーを押しながら、**ユニット選択**ペインで2台以上のサーバーを選択します。
-または-
Ctrlキーを押します。**Scan Mode**タスク・ボタンが現れます。
- 3 **Scan Mode**タスク・ボタンをクリックします。**サムネール・ビューア**ウィンドウが現れます。

サムネール・ビューのステータス・インジケータ

緑色のLEDはサーバーが現在スキャンされていることを示します。赤色のXはそのサーバーのスキャンが前回正しく行われなかったことを示します。スキャンは、アカウント情報や無効なパス(Remote Console Switch上のサーバー・パスが使用不可)、あるいは他の何らかの理由により正しく実行されない場合があります。マウス・ポインタを赤いX上に合わせると、ツールのヒントが表示され、失敗の理由が示されます。スキャン設定のセットアップ

スキャン設定を設定するには:

- 1 サムネール・ビューから、**Options** → **Preferences**を順に選択します。**Preferences**ダイアログ・ボックスが表示されます。
- 2 **View Time Per Server**ボックスに、スキャン中に各サムネールがアクティブになる時間(10~60秒)を入力します。
- 3 **Time Between Servers**ボックスに各サーバーの間でスキャンが停止する時間の長さ(5~60秒)を入力します。
- 4 **OK**をクリックします。

サムネール・ビューアの操作

個々のサムネール・フレームをハイライトしてサムネール・メニューを選択すると、そのサーバーのインタラクティブ・セッションを立ち上げたり、そのサーバーをスキャンシーケンスに追加したり、そのサーバーのログインのアカウント情報を設定したりすることができます。Optionsメニューでは、スキャン設定へのアクセスに加え、スキャンの一時停止、全サーバーのサムネール・サイズ設定などができます。

サーバーのビデオ・セッションを起動するには:

- 1 サーバーのサムネールを選択します。
- 2 サムネール・ビューアからThumbnail → [サーバー名] → **View Interactive Session**を順に選択します。

-または-


サーバーのサムネールを右クリックして、**View Interactive Session**を選択します。インタラクティブなビューアのウィンドウで、サーバーのビデオが起動します。


スキャン・シーケンスでサーバーを有効または無効にするには:

- 1 サーバーのサムネールを選択します。
- 2 サムネール・ビューアから、Thumbnail → [サーバー名] → Enableを選択します。

-または-

サーバーのサムネールを右クリックし、Enableを選択します。そのサーバーは、サーバーのサムネールのスキャン・シーケンスに含まれるか、除外されます。

 注: Enableメニュー項目の状態は、選択するたびにチェック付き(有効)からチェックなし(無効)に切り替わります。

 注: サーバーがユーザーからアクセスされている場合、そのサーバーのサムネールについてはEnableメニューは無効になります。

スキャン・シーケンスを一時停止または再始動するには:

サムネール・ビューアから、Options → Pause Scanを順に選択します。サムネール・ビューアでスキャンが進行中の場合、スキャン・シーケンスは現在のサムネールで一時停止し、スキャンが一時停止している場合はスキャン・シーケンスが再開します。

サムネールのサイズを変更するには:

- 1 サムネール・ビューアから、Options → Thumbnail Sizeを順に選択します。
- 2 必要なサムネールのサイズをメニューから選択します。

マクロを使用したキーストロークのサーバーへの送信

ビューアのMacrosメニューを使うと、複数のキーストロークを簡単にサーバーに送ることができます。ビューアには、Microsoft Windowsシステム、Sunシステム、Linuxシステムで利用できるキーストローク選択項目のリストが表示されます。

どちらのシステムを使うかを選ぶには:

ビューアでMacroメニューをクリックします。Display on Menuを選択し、Windows、Sun、Linuxのいずれかを選択します。

キーストロークをサーバーに送るには:

ビューアのMacroメニューをクリックし、サーバーに送信するキーストロークを含むマクロの名前を選択します。図 4.11、図 4.12および図 4.13に利用できるマクロを示します。

図 4.11: ビューアのマクロ・メニュー展開表示 (Windowsオプション)

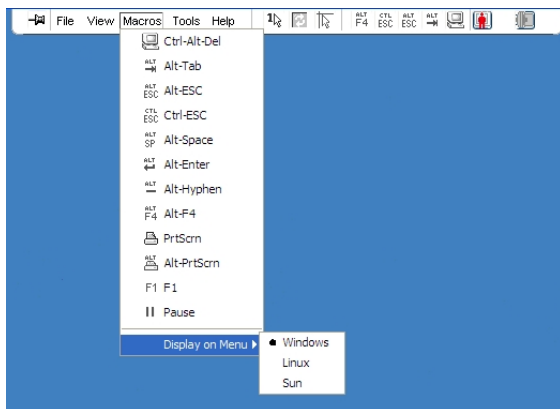


図 4.12: ビューアのマクロ・メニュー展開表示 (Sunオプション)

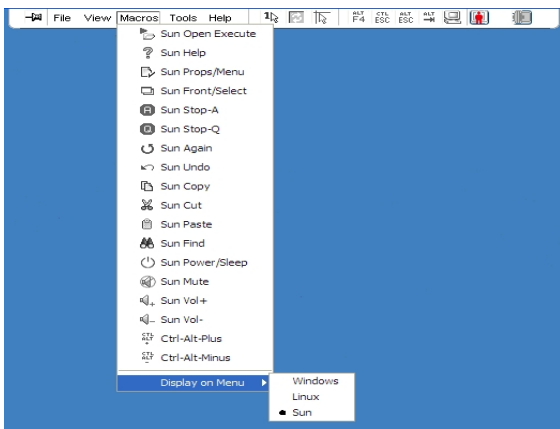
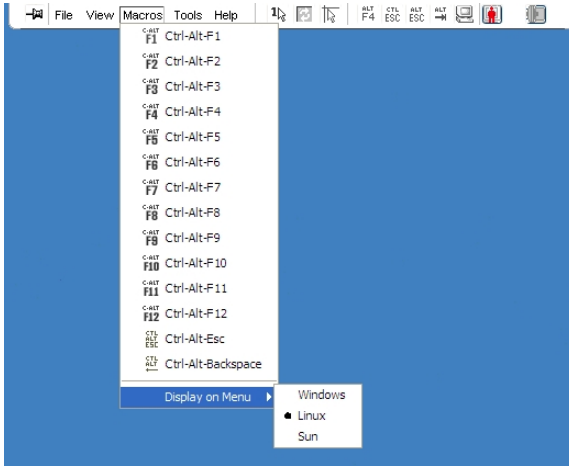


図 4.13: ビューアのマクロメニュー展開表示(Linuxオプション)

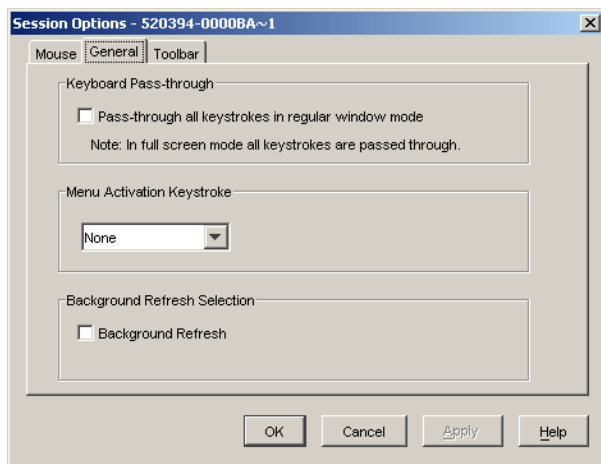


Session Options – Generalタブ

Session Optionsダイアログ・ボックスのGeneralタブを使用すると、フルスクリーン以外のモードでのKeyboard Pass-throughオプション、Menu Activation Keystroke、およびBackground Refreshの選択内容を制御できます。

Keyboard Pass-throughチェック・ボックスでは、Keyboard Pass-throughモードを有効にするかどうかを指定できます。Keyboard Pass-throughオプションは、デフォルトでは選択されていません。

図 4.14: Session Options – Generalタブ



Menu Activation Keystrokeリスト(None、Pause、F1～F12)を使用すると、ツールバーを起動するキーストロークを選択できます。

Background Refreshチェック・ボックスでは、背景の更新を有効にするかどうかを指定できます。このオプションを選択した場合、デバイスで変更が生じたかにかかわらず、ビューアにデバイスから一定のデータの流が送信されます。

セッション・オプションを変更するには:

- 1 ビューアのToolsメニューから**Session Options**を選択します。Session Options ツールバーが表示されます。
- 2 **General**タブをクリックします。
- 3 セッションのオプションを必要に応じて変更します。
- 4 **OK**をクリックします。

スクリーン・キャプチャー


ビューアでは、画面の内容をキャプチャーし、ファイルに保存したり、クリップボードにコピーしたりできます。

ファイルに画面をキャプチャーするには:


- 1 ビューアで、**File** → **Capture to File**を順に選択します。**Save**ダイアログが表示されます。
- 2 ファイルを保存する場所を参照します。
- 3 **File Name**フィールドにファイル名を入力し、**Save**をクリックします。

クリップボードに画面をコピーするには:

ビューアで、**File** → **Capture to Clipboard**を順に選択します。画像がクリップボードに保存され、文書や画像編集アプリケーションに貼り付けられるようになります。

 注: Capture to Clipboard機能はLinuxでは利用できません。

セッション共有オプション

 注: Dell 1081ADと2161ADスイッチの場合、セッション共有をサポートするためにDell リモート・アクセス・キー (RAK) が必要です。

セッション共有の構成を実行できるのは、管理者、およびアプライアンス管理者またはユーザー管理者の管理者アクセス権を持つその他のユーザーです。ターゲット・デバイスとの最初のKVMセッションを開始したユーザーは、プライマリ・ユーザーと呼ばれます。別の(セカンダリ)ユーザーがこの同じターゲット・デバイスとのKVMセッションを開始しようとした場合、セカンダリ・ユーザーに与えられるオプションは次の2つの条件により異なります。

- ・ 2人のユーザーのアクセス権
- ・ 管理者がグローバル接続共有を構成しているかどうか

自動共有、エクスクルーシブ接続、およびステルス接続の構成はすべて、接続の共有が有効になっている場合にのみ可能なオプションです。

自動共有

接続の共有により、複数のユーザーが同時に共通のターゲット・デバイスと対話することができます。プライマリ・ユーザーの場合、別のユーザーが接続の共有を希望していることがダイアログ・ボックスによって知らされます。**Yes**を選択して共有を許可するか、**No**を選択して共有を拒否できます。または**Passive Share**ボック

スをクリックして、新しいユーザーにその接続への制御権を持たない共有を許可することができます。

別のユーザーが表示しているデバイスでビデオ・セッションを開こうとした場合、そのデバイスが表示中であることが通知されます。共有設定の内容に応じて、ビデオ・セッションの共有またはプリエンプト操作のオプションが提供されます。また、ステルス・ビデオ・セッションの開始オプションも提供されます。

デバイスへのアクセスは、デバイスに対する現在のユーザーの接続権限に左右されます。ビデオ・セッション・ユーザーには、プライマリ・ユーザーおよび最大11の同時接続セカンダリ・ユーザーの2種類があります。接続を共有するすべてのユーザーで、プリエンプト操作リクエストを許可または拒否できるのは、プライマリ・ユーザーのみです。プライマリ・ユーザーはまた、ビデオ・パラメーターと、ビデオ・セッションの表示解像度に対する制御権も維持します。

セカンダリ・ユーザーは、マウスおよびキーボードによるデータ入力が可能なアクティブなユーザーか、マウスおよびキーボードによるデータ入力が許可されていない受動ユーザーのいずれかになります。

Remote Console Switchで**Automatic Sharing**が有効になっている場合、セカンダリ・ユーザーはプライマリ・ユーザーにセッション参加の許可を求める必要はありません。

プライマリ・ユーザーがそのセッションを終了すると、アクティブなユーザー権限を持ち、参加順が最も古いセカンダリ・ユーザーがプライマリ・ユーザーになります。プライマリ・ユーザーがセッションを終了するときに、アクティブなユーザーの権限を持ちセッションを共有するセカンダリ・ユーザーが存在しない場合には、そのセッションは終了します。

デジタル共有モードを使用すると、複数のユーザーがターゲット・デバイスの表示とインタラクションを実行できます。セッション共有中、セカンダリ・ユーザーは、キーボードとマウスの制御権を持つアクティブ・ユーザー、または制御権のないパッシブ・ユーザーのどちらにもなり得ます。

KVMセッションを共有できるようにスイッチを構成するには、以下の手順で行います：

- 1 Explorerで**Appliances**ボタンをクリックします。
- 2 次の手順のいずれかを実行します：

- ・ ユニット・リスト内のRemote Console Switchをダブルクリックします。
- ・ ユニット・リストからRemote Console Switchを選択し、Manage Appliance ボタンをクリックします。
- ・ ユニット・リスト内のRemote Console Switchを右クリックします。ポップアップ・メニューから、**Manage Appliance**を選択します。
- ・ ユニット・リストからRemote Console Switchを選択し、Enterキーを押します。

3 **Global - Sessions**のサブカテゴリを選択します。

4 **Connection Sharing**領域内の**Enable Share Mode**を選択します。

5 **Automatic Sharing**を選択することもできます。共有の自動化を選択すると、セカンダリ・ユーザーはプライマリ・ユーザーにアクセス権をリクエストせずに、自動的にKVMセッションを共有できるようになります。

デジタル接続の共有は以下の手順で行います：

1 Explorerで**Devices**ボタンをクリックします。

2 次の手順のいずれかを実行します：

- ・ ユニット・リスト内のターゲット・デバイスをダブルクリックします。
- ・ ターゲット・デバイスを選択し、**Connect Video**ボタンをクリックします。
- ・ ターゲット・デバイスを右クリックします。ポップアップ・メニューから、**Connect Video**を選択します。
- ・ ターゲット・デバイスを選択し、Enterキーを押します。

他のユーザーがこのターゲット・デバイスを参照している場合は、このターゲット・デバイスがすでにKVMセッション中であることを告げるメッセージが表示されます。

スイッチで接続共有がオンになっており、(プライマリ・ユーザーのアクセス権に対して優位な)アクセス権を持っている場合は、既存のセッションを共有またはプリエンプトするように促すメッセージが表示されます。

1 選べる場合は、**Share**を選択します。

2 次の手順のいずれかを実行します：

- ・ **OK**または**Yes**をクリックします。Automatic Sharingが選択されていない場合は、プライマリ・ユーザーに共有リクエストが送信されます。プライマリ・ユーザーは、アクティブ・ユーザーまたはパッシブ・ユーザー(読み取り専用)として共有リクエストを承認することも、リクエストを完全に拒否することもできます。
- ・ **No**をクリックすると共有リクエストはキャンセルされます。

プライマリ・ユーザーが共有リクエストを承認した場合、あるいはAutomatic Sharingがオンになっている場合は、ターゲット・デバイス・セッションに対するKVMセッションが開き、セッション・ステータスがアクティブかパッシブかを示すセッション・タイプ・アイコンが新たなビデオ・ビューア・ウィンドウ内に表示されます。リクエストが拒否されると、その旨を告げるメッセージが表示されます。管理者には、この段階でいくつかのオプションがあります。管理者はもう一度接続してセッションのプリエンプトを試行するか、ステルス・モードで接続するか、またはセッションを完全に終了することができます。

共有モードで接続するためのプロンプトが表示されない場合、ターゲット・デバイスの接続先のスイッチでデジタル共有モード・セッションを許可するよう設定されていないか、またはスイッチがRemote Console Switchではないかのどちらかです。

エクスクルーシブ・モード

セッションの共有とエクスクルーシブ接続が有効になっていれば、エクスクルーシブのKVMセッションを確立できます。エクスクルーシブ・モード・セッションの場合、他のユーザーからの共有リクエストは受信できません。ただし、管理者はセッションをプリエンプト(または終了)するか、またはセッションをステルス・モードでモニターするかを選択することができます。

エクスクルーシブ・モードを選択したときに他のユーザーがセッションを共有している場合、**エクスクルーシブ・モード**の選択により他のユーザーはセッションから接続解除されると警告を受けます。



注: エクスクルーシブ・セッションをリクエストできるのは、プライマリ・ユーザーのみです。エクスクルーシブ・モードのリクエスト時に他のユーザーが共有している場合、プライマリ・ユーザーのアクセス・レベルがどうかにかかわらず、すべてのユーザーが接続解除されます。

スイッチでエクスクルーシブのKVMセッションを有効にするには、以下の手順で行います：

- 1 Explorerで**Appliances**ボタンをクリックします。
- 2 次の手順のいずれかを実行します：
 - ・ ユニット・リスト内のRemote Console Switchをダブルクリックします。
 - ・ ユニット・リストからRemote Console Switchを選択し、**Manage Appliance**ボタンをクリックします。
 - ・ ユニット・リスト内のRemote Console Switchを右クリックします。ポップアップ・メニューから、**Manage Appliance**を選択します。
 - ・ ユニット・リストからRemote Console Switchを選択し、Enterキーを押します。
- 1 Global - Sessionsのサブカテゴリーを選択します。
- 2 Connection Sharing領域内の**Enable Shared**チェック・ボックスを選択します。
- 3 **Connection Sharing**領域内の**Exclusive Connections**を選択します。

エクスクルーシブ・モードでのビデオ・ビューアにアクセスできるのは、共有接続のプライマリ・ユーザー、もしくは非共有セッションでの唯一のユーザーのみです。

エクスクルーシブ・モード中のビデオ・ビューアへのアクセスは以下の手順で行います：

- 1 ターゲット・デバイスに対するKVMセッションを開始します。
- 2 Video Viewerツールバーから、**Tools** → **Exclusive Mode**を順に選択します。
- 3 KVMセッションが現在共有中である場合、このセッションをエクスクルーシブに指定できるのはプライマリ・ユーザーのみです。プライマリ・ユーザーは、エクスクルーシブ・セッションのコマンドが実行されるとセカンダリ・ユーザーのセッションは終了される旨のメッセージを受けます。

次の手順のいずれかを実行します：

- ・ **Yes**を選択すると、セカンダリ・ユーザーのセッションは終了されます。

- ・ **No**をクリックすると、エクスクルーシブ・モードの操作はキャンセルされません。

セカンダリ・ユーザーはエクスクルーシブのKVMセッションを共有できません。ただし、管理者または特定のアクセス権のあるユーザーの場合には、セッションを終了させることができます。

ステルス接続

管理者は、ターゲット・デバイスにステルス・モードで接続し、リモート・ユーザーのビデオ出力を(ユーザーには分からない状態で)閲覧することができます。ステルス・モード中、管理者はターゲット・デバイスのキーボードやマウスを制御することはできません。

スイッチでステルスのKVMセッションを有効にするには、以下の手順で行います：

- 1 Explorerで**Appliances**ボタンをクリックします。
- 2 次の手順のいずれかを実行します：
 - ・ ユニット・リスト内のRemote Console Switchをダブルクリックします。
 - ・ ユニット・リストからRemote Console Switchを選択し、**Manage Appliance**ボタンをクリックします。
 - ・ ユニット・リスト内のRemote Console Switchを右クリックします。ポップアップ・メニューから、**Manage Appliance**を選択します。
 - ・ ユニット・リストからRemote Console Switchを選択し、Enterキーを押します。
- 3 **Global – Sessions**のサブカテゴリーを選択します。
- 4 **Connection Sharing**領域内の**Stealth Connections**を選択します。

ターゲット・デバイスをステルス・モードでモニターするには、以下の手順で行います：

- 1 Explorerで**Devices**ボタンをクリックします。
- 2 次の手順のいずれかを実行します：
 - ・ ユニット・リスト内のターゲット・デバイスをダブルクリックします。
 - ・ ターゲット・デバイスを選択し、**Connect Video**ボタンをクリックします。

- ・ ターゲット・デバイスを右クリックします。ポップアップ・メニューから、**Connect Video**を選択します。
 - ・ ターゲット・デバイスを選択し、Enterキーを押します。
- 3 他のユーザーがすでにこのターゲット・デバイスを参照している場合は、このターゲット・デバイスがすでにKVMセッション中であることを告げるメッセージが表示されます。

スイッチで接続の共有およびステルス接続がオンになっており、アクセス権(プライマリ・ユーザーのアクセス権に対して優位な)を持っている場合は、現行セッションを共有またはプリエンプトするように促すメッセージが表示されます。選べる場合は、**Stealth**を選択します。

4 次の手順のいずれかを実行します：

- ・ **OK**または**Yes**をクリックします。
- ・ **No**をクリックするとステルス接続のリクエストはキャンセルされます。

ターゲット・デバイスへのKVMセッションが開き、管理者は他に分からない状態で、ターゲット・デバイスのビデオ出力をすべて参照できるようになります。

ステルス接続がオプション中に表示されない場合には、下記のいずれかを意味します：

- ・ ターゲット・デバイスの接続先のスイッチでStealth Connectionsがオンになっていない
- ・ 必要なアクセス権がない(プリエンプト権限の次にステルス権限が位置しています)
- ・ ターゲット・デバイスの接続先のスイッチがRemote Console Switchではない

プリエンプト・モード

プリエンプトは、有効な権限を持つユーザーが、同等またはそれ以下の権限を持つ別のユーザーに対してサーバーを管理する方法です。



注：プリエンプト操作中の接続を共有するすべてのユーザーが警告を受けますが、(有効になっている場合)プリエンプト操作を拒否できるのはプライマリ・ユーザーのみです。

表4-3に、プリエンプト操作のシナリオおよびプリエンプト操作リクエストを拒否するシナリオの詳細を示しています。プリエンプト操作とバーチャル・メディア・セッションの予約およびロックの詳細については、「セッション共有オプション」(ページ87) を参照してください。

表 4.3: プリエンプト操作のシナリオ

現在のユーザー	プリエンプト操作リクエスト元	プリエンプト操作リクエスト拒否、可／不可
リモート・ユーザー	ローカル・ユーザー	不可
リモート・ユーザー	リモート管理者	不可
リモート・ユーザー	Remote Console Switch管理者	不可
Remote Console Switch管理者	ローカル・ユーザー	可
Remote Console Switch管理者	Remote Console Switch管理者	可
リモート管理者	ローカル・ユーザー	不可
リモート管理者	リモート管理者	可
リモート管理者	Remote Console Switch管理者	不可
ローカル・ユーザー	リモート管理者	可
ローカル・ユーザー	Remote Console Switch管理者	可

リモート管理者によるリモート・ユーザーのプリエンプト操作

リモート管理者が、リモート・ユーザーによってアクセスされているサーバーへアクセスを試みた場合、プリエンプトされることがユーザーに通知されるまでの間待機するように管理者に求めるメッセージが表示されます。リモート・ユーザーはこのプリエンプト・リクエストを拒否できないため、接続解除されます。接続解除まで

の時間は、Sessionダイアログ・ボックスのビデオ・セッションのプリエンプト操作タイムアウト設定で定義します。



注: 表示中のサーバーがアボセント製スイッチに接続されている場合は、その期間は表示されません。

ローカル・ユーザー／リモート管理者のリモート管理者によるプリエンプト操作

管理者が、同等の権限を持つローカル・ユーザーまたは別のリモート管理者によってアクセスされているサーバーへアクセスを試みた場合、現在接続しているユーザーはプリエンプト操作リクエストを許可または拒否することができます。接続しているローカル・ユーザーまたはリモート管理者に、プリエンプト操作リクエストを受け入れるかどうかを尋ねるメッセージが表示されます。プリエンプト操作リクエストが拒否された場合、リモート管理者にリクエストの拒否およびサーバーへのアクセス不可を伝えるメッセージが表示されます。



注: 表示中のサーバーがアボセント製スイッチに接続されている場合、ユーザーはプリエンプト操作の許可または拒否を選択することができません。



注: プリエンプト操作リクエストが拒否されるシナリオでは、Session Preemption Requestダイアログ・ボックスが表示されます。このダイアログで、Acceptボタンをクリックしてプリエンプト操作リクエストを許可したり、Rejectボタンをクリックするまたはダイアログ・ボックスを終了して、プリエンプト操作リクエストを拒否することができます。

現行のユーザーをプリエンプトする場合は以下の手順で行います：

- 1 Explorerで**Devices**ボタンをクリックします。
- 2 次の手順のいずれかを実行します：
 - ・ ユニット・リスト内のターゲット・デバイスをダブルクリックします。
 - ・ ターゲット・デバイスを選択し、**Connect Video**ボタンをクリックします。
 - ・ ターゲット・デバイスを右クリックします。ポップアップ・メニューから、**Connect Video**を選択します。
 - ・ ターゲット・デバイスを選択し、Enterキーを押します。

他のユーザーがこのターゲット・デバイスを参照している場合は、このターゲット・デバイスがすでにKVMセッション中であることを告げるメッセージが表示されます。

このスイッチで接続共有がオンになっている場合は、セッションを共有するかどうかを選択できます。接続共有の詳細については、「プリエンプト・モード」を参照してください。アクセス権(プライマリ・ユーザーのアクセス権に対して優位な)を持っている場合は、現行セッションを共有またはプリエンプトするように促すメッセージが表示されます。

- 3 選べる場合は、**Preempt**を選択します。
- 4 次の手順のいずれかを実行します：
 - ・ **OK**または**Yes**をクリックします。プライマリ・ユーザーにプリエンプト通知が送られます。アクセス権がプライマリ・ユーザーより下位の場合、プライマリ・ユーザーはプリエンプト操作を拒否できることがあります。
 - ・ **No**をクリックすると、プライマリ・ユーザーの接続は維持されます。
- 5 プリエンプト操作が完了すると、ターゲット・デバイス・セッションのビデオ・ビューアが開きます。

バーチャル・メディア

バーチャル・メディア・サポートにより、USBメディア・デバイスをアプライアンスのUSBポートに直接接続することができ、アプライアンスに接続されているどのターゲット・デバイスでも使用できます。バーチャル・メディアには、リモートからもアクセスできます。リモート・メディア・セッションでは、クライアント・コンピューターに直接取り付けられたデバイスを使用します。

バーチャル・メディア機能により、あらゆるサーバーとの間でバーチャル・メディアのデータを表示、移動、コピーすることができます。オペレーティング・システムのインストール、オペレーティング・システムの回復、ハード・ドライブの回復や複製、BIOSの更新、サーバーのバックアップが可能になり、リモート・システムを効率よく管理できます。

KVMセッションを行うユーザーは、ターゲット・デバイスにマップされたどのメディア・デバイスにもアクセスできます。不正アクセスなどのセキュリティ・リスクを回避するため、バーチャル・メディア・セッションをKVMセッションにロックすることができます。

バーチャル・メディア・デバイスのメディアを変更する場合は、まず、バーチャル・メディア・デバイスのマッピングを解除してください。それから新しいメディアを挿入し、バーチャル・メディア・デバイスを再マッピングします。これで、このメディアを新しいバーチャル・メディア・セッションで利用することができます。

バーチャル・メディア・サポートの要件を次に示します。

- ・ DVD-ROMドライブ(1台)と大容量記憶装置(1台)は同時にマッピングできません。
 - ・ CD/DVD-ROMドライブまたはISOディスク・イメージ・ファイルはバーチャルのDVDドライブとしてマッピングされます。
 - ・ ディスク・ドライブ、ディスク・イメージ・ファイル、USBメモリー・デバイス、その他のメディア・タイプはバーチャルの大容量記憶装置としてマッピングされます。
- ・ 所定のサーバーでバーチャル・メディアを使用するには、Dell USB2 SIP、Dell USB2+CAC SIP、Avocent MPUIQ-VMC、DSAVIQ-PS2M、またはDSAVIQ-USB2のモジュールを用いて、そのサーバーをKVMに接続する必要があります。
- ・ パッシング拡張モジュールに接続されているサーバーに対してバーチャル・メディア・セッションを開始することはできません。
- ・ バーチャルにマッピングしようとしているUSB2対応メディアのタイプが、ターゲット・デバイスでサポートされている必要があります。すなわち、ターゲット・デバイスでポータブルUSB 2.0メモリー・デバイスがサポートされていない場合には、ローカル・デバイスをバーチャル・メディア・ドライブとしてターゲット・デバイスにマッピングすることはできません。
- ・ ユーザー(またはユーザーが所属するユーザー・グループ)には、バーチャル・メディア・セッションまたはターゲット・デバイスに対する専用バーチャル・メディア・セッションを確立する権限が必要です。
- ・ 1082DSは、同時に3つまでのバーチャル・メディア・セッション(ローカル、リモートを含む)をサポートしています。2162DSは、同時に4つまでのバーチャル・メディア・セッション(ローカル、リモートを含む)をサポートしています。4322DSは、同時に6つまでのバーチャル・メディア・セッション(ローカル、リ

モートを含む)をサポートしています。ターゲット・デバイスに対するバーチャル・メディア・セッションは、一度に1つのセッションのみ実行可能です。

共有およびプリエンプト操作

KVMセッションとバーチャル・メディア・セッションは別個のものです。従って、共有/専用/プリエンプト・セッションには多くのオプションがあります。

例えば、KVMセッションとバーチャル・メディア・セッションは、一緒にロックすることが可能です。このモードでは、KVMセッションの接続が解除されると、関連付けられているバーチャル・メディア・セッションの接続も解除されます。これらのセッションが一緒にロックされていない場合は、KVMセッションは終了しますが、バーチャル・メディア・セッションはアクティブのままになります。

関連するアクティブなKVMセッションがないにもかかわらず、バーチャル・メディア・セッションがターゲット・デバイスでアクティブになっている場合には、このチャンネルへのオリジナル・ユーザー(ユーザーA)による再接続、または、別のユーザー(ユーザーB)による接続が可能です。ユーザーAのみがKVMセッションに関連付けられたターゲット・デバイスにアクセスできるよう設定することもできます。このオプション(Reserved)はバーチャル・メディア・ウィンドウ内にあります。

ユーザーBがこのKVMセッションにアクセスしている場合(Reservedのオプションがオンになっていない)、このユーザーはバーチャル・メディア・セッションで使用されているメディアを制御することが可能です。これは、一部の環境においては望ましくない場合があります。

ティアド接続環境でReservedオプションを使用すると、ユーザーAのみが下層アプライアンスにアクセス可能で、上層アプライアンスと下層アプライアンス間のKVMチャンネルがユーザーA専用となります。

プリエンプト・レベルにより、この他にも設定に柔軟性を持たせることができます。「プリエンプト・モード」(ページ93)を参照してください。

バーチャル・メディアの起動

ビューアを使用して、バーチャル・メディアをアプライアンスからリモートで起動します。ビューアは、OBWIまたはRCSソフトウェアから起動できます。バーチャル・メディア・クライアントでは、ユーザーがローカル・ドライブをターゲット・サーバーのバーチャル・ドライブにマッピングすることができます。

RCSソフトウェアからバーチャル・メディアを起動するには：

- 1 ソフトウェアからビューアを起動します。詳細については、「ビューアの使用法」(ページ63) を参照してください。
- 2 **Tools** → **Virtual Media**を順に選択します。
- 3 このセッションを予約に指定したい場合は、「バーチャル・メディア」ウィンドウで**Details**をクリックした後、**Reserved**チェックボックスをオンにします。

ターゲット・サーバーには、フロッピー／フラッシュ・ドライブとCD/DVDドライブの2種類のデバイスをマッピングできます。バーチャル・メディア・クライアントでは、それぞれ1つを同時にマッピングできます。また、バーチャル・メディア・クライアントでは、フロッピーのイメージ・ファイル(*.img) やCDのイメージ・ファイル(*.iso) をバーチャル・デバイスにマッピングすることも可能です。

バーチャル・メディア・インターフェイスは、フロッピー・ドライブ、CD/DVDドライブ、ステータスという3つの区分で構成されています。バーチャル・メディア・セッションがKVMセッションにロックされると、バーチャル・メディア・クライアント画面の右上にロック状態を示すアイコンが表示されます。

バーチャル・メディア・ドライブのマッピング

バーチャル・メディア・ドライブをマッピングするには：

- 1 ビデオ・ビューアのツールバーから**Tools** → **Virtual Media**を選択してバーチャル・メディア・セッションを開始します。
- 2 物理ドライブをバーチャル・メディア・ドライブとしてマッピングするには、以下の手順で行います：
 - a. バーチャル・メディア・ウィンドウで、マッピングしたいドライブの横の**Mapped**チェック・ボックスをオンにします。
 - b. マッピングするドライブを読み取り専用アクセスに制限したい場合は、ドライブのマッピングを開始する前に**Read Only**チェック・ボックスを選択しておきます。マッピングされたドライブすべてが読み取り専用既に設定されている場合は、このチェック・ボックスにはチェック印が付いており、これを変更することはできません。

セッションが読み取り／書き込み可能に設定されていて、特定のドライブへのアクセスを読み取り専用で制限したい場合には、**Read Only**チェック・ボックスを選択して設定を変更することができます。

3 ISOまたはディスク・イメージをバーチャル・メディア・ドライブとして追加／マッピングするには、以下の手順で行います：

- a. バーチャル・メディア・ウィンドウで、**Add Image** をクリックします。
- b. Common File Chooserウィンドウが開き、ディスク・イメージ・ファイル(.iso または.imgの拡張子)を含むディレクトリが表示されます。ISOまたはディスク・イメージ・ファイルを選び、**Open**をクリックします。
- c. 確認のため、ファイル・ヘッダにはチェック印がつきます。チェック印がついていればCommon File Chooser ウィンドウは閉じられ、選択したイメージ・ファイルがバーチャル・メディア・ウィンドウ内に開きます。マッピング済みチェック・ボックスを選択すると、このウィンドウからイメージ・ファイルをマッピングできます。
- d. 他にもISOやディスク・イメージを追加したい場合は、手順a～cを繰り返します。イメージ・ファイルは(メモリーの容量範囲内で)いくつでも追加できますが、バーチャルのDVD-ROMまたは大容量記憶装置は同時に1つしかマッピングできません。

多過ぎる数のドライブ(DVDドライブ1つと大容量記憶装置1つ)、あるいは多過ぎる特定タイプ・ドライブ(1つのDVDドライブまたは大容量記憶装置より多く)をマッピングしようすると、メッセージが表示されます。さらに新しいドライブをマッピングしたい場合には、まず現在マッピングされているドライブのマッピングを解除してから、別のドライブをマッピングしてください。物理ドライブまたはイメージをマッピングすると、ターゲット・デバイスで使用できるようになります。

バーチャル・メディア・ドライブのマッピングを解除するに：

マッピングされたドライブをターゲット・デバイスから取り外します。Mappedチェック・ボックスの選択を解除します。

バーチャル・メディアの接続ステータス

ステータスの区分には、バーチャル・メディアの接続に関する情報が表示されます。現在確立されている接続がない場合は、各欄に「No connection」または「n/a」と表示されます。

バーチャル・メディア・ドライブの状態を表示するには、以下の手順で行います：

- 1 バーチャル・メディア・ウィンドウで、**Details**をクリックします。ウィンドウが拡張され、Details表が表示されます。各行の情報は、次のとおりです：
 - ・ Target Drive — ターゲット・サーバーに接続されているバーチャル・デバイス
 - ・ Connected To — バーチャル・デバイスに接続されているローカル・ドライブの名前
 - ・ Read Bytes — ターゲット・サーバーがローカル・デバイスから読み取ったバイト数
 - ・ Write Bytes — ターゲット・サーバーがローカル・デバイスに書き込んだバイト数
 - ・ Duration — ドライブをマッピングしてから経過した時間。
- 2 Detailsビューを閉じるには、**Details**を再度クリックします。

バーチャル・メディア・セッション

バーチャル・メディア・セッションは、2つのUSB接続が単一ケーブルを介して確立されるときに開始されます。これらの接続は、コンピューター上でUSB CD/DVDドライブまたはUSB大容量記憶装置として認識されます。バーチャル・メディア・セッションの設定には、ロック状態、マップされたドライブへのアクセス、暗号化レベルがあります。

- ・ **Locked** — 特定のKVMセッションに関連付けられたバーチャル・メディア・セッション。KVMセッションを終了すると、バーチャル・メディア・セッションが終了します(例えば、KVMセッションがプリアンプトされた場合、ユーザーによって閉じられた場合、またはスクリーン・セーバーが起動して停止した場合、関連付けられたバーチャル・メディア・セッションがアプライアンスによって自動的に

終了します)。ただし、ロック状態のバーチャル・メディア・セッションを終了しても、対応するKVMセッションは終了しません。

- ・ **Mapped drive access** — このアクセス・モードは読み取り専用を設定できます。アクセス・モードが読み取り専用の場合、クライアント・コンピューター上のマップされたドライブにはデータの書き込みはできません。アクセス・モードが読み取り専用になっていなければ、マップされたドライブに対する読み取りと書き込みが可能になります。マップされるドライブが設計上読み取り専用(特定のCDドライブやDVDドライブ、ISOイメージなど)の場合には、読み取り／書き込みの両方可能に設定されていても無視されます。読み取り専用に設定しておく、大容量記憶装置や外付けUSBメディアのような読み取り／書き込み対応ドライブをマップした後に、誤って上書きされることを回避できます。
- ・ **Encryption level** — バーチャル・メディア・セッションでは、最大3つの暗号化レベルを構成できます。どの組み合わせでも有効です。選択肢には、AES、DES、3DES、および128ビットRC4(ARCFOUR) SSL暗号化があります。設定されている最も高位のレベルが使用されます。デフォルト設定では暗号化は設定されていません(暗号化レベルが選択されていません)。

バーチャル・メディア・セッションの予約

バーチャル・メディア・セッションを予約して、指定したユーザー名または管理者のみがセッションにアクセスしたり、セッションを終了したりするようになります。KVMセッションを閉じた後もバーチャル・メディア・セッションを続行したい場合は、バーチャル・メディア・セッションを予約できます。予約したバーチャル・メディア・セッションは、関連付けられたKVMセッションが閉じてもアクティブに維持されます。

バーチャル・メディア・セッションを予約するには:

バーチャル・メディア・ウィンドウで、**Details**をクリックし、**Reserve**チェック・ボックスを選択します。

USBバスのリセット

USBリセット機能は、ターゲット・デバイス上のすべてのUSBメディア(マウスおよびキーボードを含む)をリセットします。この操作を実行するのはターゲット・デバイスが応答しない場合のみに限定してください。

USBバスをリセットするには:

- 1 バーチャル・メディア・ウィンドウで、**Details**をクリックします。

2 USB Resetを選択します。

バーチャル・メディア・セッションの終了

バーチャル・メディア・ドライブを終了するには以下の手順で行います：

- 1 ExitまたはXをクリックし、ウィンドウを閉じます。
- 2 マップしたドライブがある場合は、マップが解除される旨のメッセージが表示されます。マップを解除するにはYesをクリックしてウィンドウを閉じ、マップの解除をキャンセルするにはNoをクリックしてウィンドウを閉じます。

ロック状態のバーチャル・メディア・セッションに関連付けられているアクティブなKVMセッションを接続解除しようとする、バーチャル・メディアのマッピングが終了になることを告げる確認メッセージが表示されます。

バーチャル・メディアとUSB2の制限

Remote Console Switchのバーチャル・メディア機能により、接続されているデバイスのUSBポートへの接続が可能になります。この機能を使用することにより、スイッチの場所にいるまたはRCSソフトウェアを使用しているユーザーは、接続されているコンピューターからUSBのCD/DVD-ROMドライブ、ディスク・ドライブまたはFLASHドライブなどのローカルUSBストレージ・デバイスにアクセスすることができます。

USB2 SIPは、キーボード、マウス、DVDドライブ、大容量記憶装置の4つの機能に対応する複合デバイスです。CD/DVDドライブと大容量記憶装置が、バーチャル・メディア・セッションがマップされているかどうかに関係なく、ターゲット・デバイスに表示されます。メディア・デバイスがマップされていない場合は、メディアなしの状態が表示されます。バーチャル・メディアがターゲット・デバイスにマップされていると、メディアが挿入されたことがターゲット・デバイスに通知されます。メディア・デバイスのマップが解除されると、メディアが取り外されたことがターゲット・デバイスに通知されます。このため、USB2バーチャル・デバイスは、ターゲット・デバイスから接続解除されません。

USB2 SIPケーブルは、キーボードとマウスを複合USB2 デバイスとして表示します。このため、BIOSで複合USB 2.0ヒューマン・インターフェイス・デバイス(HID)をサポートしている必要があります。接続されたコンピューターのBIOSがこの種のデバイスをサポートしない場合は、オペレーティング・システムにUSB 2.0デバイ

ス・ドライバが読み込まれるまで、キーボードとマウスが作動しない可能性があります。この場合、USB 2.0接続のキーボードとマウスに対するBIOSサポートを含むBIOSアップデートがコンピューター・メーカーから提供されていることがあります。

バーチャル・メディアを使用したコンピューターの起動

多くの場合、このバーチャル・メディアの機能によって、接続されているコンピューターをスイッチのUSBポートに取り付けられているデバイスから起動することができます。USBポートを有する大部分のコンピューターではバーチャル・メディアを使用できますが、USBメディア・デバイスおよびシステムBIOSの一部に見られる制限により、Remote Console Switchに取り付けられているUSBデバイスからコンピューターを起動することができない場合があります。

バーチャルUSBデバイスからの起動は、ターゲット・デバイスが外付けの複合USBデバイスからの起動をサポートするかどうかによって決まります。また、外付けUSB2.0による起動をサポートするオペレーティング・システムのCD/DVDが必要です。以下は、外付けUSB2.0デバイスによる起動をサポートするオペレーティング・システムの一部の一覧です：

- ・ Windows Server 2003
- ・ Windows XP
- ・ Windows 2000 Server(Server Service Pack(SP4) 以降)

使用コンピューターでバーチャル・メディアから起動ができるかどうかを判定するには、以下の手順に従ってください。

- 1 起動可能な状態になっているオペレーティング・システムのインストールCD/DVDを挿入したUSB CD/DVD-ROMドライブをRemote Console Switchに接続して、それをターゲット・デバイスにマッピングします。ターゲット・デバイスを再起動して、取り付けしたCD/DVDドライブから起動するかどうかを指定します。外付けUSBデバイスから起動するには、BIOSを設定する必要がある場合があります。
- 2 ターゲット・デバイスが起動しない場合は、ターゲット・デバイスのUSBポートにUSB CD/DVDドライブを接続して、ターゲット・デバイスを再起動します。ターゲット・デバイスがCD/DVDドライブから正常に起動する場合は、そ

のBIOSは複合USB 2.0デバイスからの起動をサポートしていません。ターゲット・デバイスのメーカーのサポートWebサイトを閲覧して、複合USB 2.0デバイスからの起動をサポートする最新版のBIOSが利用できるかどうかを判断してください。利用できる場合は、BIOSを更新して、手順をもう一度行います。

3 ターゲット・デバイスが外付けUSB 2.0デバイスから起動できない場合は、以下の方法を使用してそのターゲット・デバイスをリモートで起動します。

- ・ BIOSバージョンの一部では、USB速度を制限するオプションが提供されています。このオプションが利用可能な場合は、USBポートの設定を「USB 1.1」または「Full Speed」モードに変更してもう一度起動してみてください。
- ・ USB 1.1カードを挿入してもう一度起動してみてください。
- ・ USB 1.1ハブをUSB2ケーブルとターゲット・デバイスの間に挿入して、もう一度起動してみてください。
- ・ 複合USB 2.0デバイスからの起動をサポートするBIOSバージョンを現在利用できるか、または更新の予定があるかどうかの情報を、ターゲット・デバイスのメーカーに問い合わせてください。

付録 A: RCSソフトウェアの更新

システムを最適な状態で運用していただくため、RCSソフトウェアの最新版をDellサポートWebサイト(dell.com/support)で入手されていることをご確認ください。

RCSソフトウェアを更新するには:

- 1 DellサポートWebサイト dell.com/support から、アップデート・ファイルをダウンロードします。
- 2 インストーラをダブルクリックします。インストーラが、ご使用のシステムに以前のバージョンのRCSソフトウェアがインストールされているかどうかをチェックします。
- 3 前のバージョンが検出されず、更新を確認するダイアログ・ボックスが表示された場合は、**Continue**をクリックします。
-または-
前のバージョンが検出され、その製品の別のバージョンがあることを警告するダイアログ・ボックスが表示された場合は、**Overwrite**をクリックして、アップグレードすることを確認します。
-または-
Cancelをクリックすると、ソフトウェアをアップグレードしないで終了します。
- 4 インストールが開始します。プログラム・ファイル、ショートカット、環境変数、レジストリ・エントリ(Win32システムのみ)がインストールされるか、現バージョンの新しいファイルと設定で上書きされます。



注: アップグレード検出プロセスが正しく機能するようにするためには、最初に再起動またはログアウトを実行する必要があります。インストーラにより設定されるレジストリ・キーは、システムからログアウトするかシステムを再起動するまで、Win32プラットフォームまたはLinux上で永続的に設定されたことにはなりません。

付録 B: キーボードとマウス

表 B.1: 分割画面でのキーボードとマウスのショートカット

操作	説明
F6キー	分割画面間で操作し、最後にフォーカスがあったアイテムへフォーカスを戻す。
F8キー	フォーカスをディバイダーに向ける。
左向き／上向き矢印キー	フォーカスがディバイダーにある場合、ディバイダーを左に移動する。
右向き／下向き矢印キー	フォーカスがディバイダーにある場合、ディバイダーを右に移動する。
Homeキー	フォーカスがディバイダーにある場合、分割画面の右側ペインが領域全体にわたって表示される(左側ペインは表示されない)。
Endキー	フォーカスがディバイダーにある場合、分割画面の左側ペインが領域全体にわたって表示される(右側ペインは表示されない)。
クリック+マウスドラッグ	ディバイダーを右または左に移動する。

表 B.2: ツリー表示コントロール・キーボードとマウスのショートカット

操作	説明
マウスのシングルクリック	既存の選択を解除し、マウスポインターが位置するノードを選択する。
マウスのダブルクリック	拡張可能なノード(子を持つノード)の拡張/縮小ステータスをトグルで切り替える。リーフノード(子を持たないノード)上では機能しない。
上向き矢印キー	既存の選択を解除し、それまで選択されていた項目のすぐ上のノードを選択する。
下向き矢印キー	既存の選択を解除し、それまで選択されていた項目のすぐ下にあるノードを選択する。
スペースキー	現在の選択項目を交互に選択/選択解除する。
Enterキー	現在の選択項目を交互に縮小/拡大する。子を持つノードにのみ適用する。リーフノード(子を持たないノード)上では機能しない。
Homeキー	既存の選択を解除し、ルートノードを選択する。
Endキー	既存の選択を解除し、ツリー表示の最後のノードを選択する。

表 B.3: ユニット・リストでのキーボードとマウス操作

操作	説明
EnterキーまたはReturnキー	選択されたユニットのデフォルト動作を起動する。
上向き矢印キー	現在の選択を解除し、一行上を選択する。
下向き矢印キー	現在の選択を解除し、一行下を選択する。
Page Upキー	現在の選択を解除し、一頁上へスクロールしてその頁の最初のアイテムを選択する。

操作	説明
Page Downキー	現在の選択を解除し、一頁下へスクロールしてその頁の最後のアイテムを選択する。
Deleteキー	削除機能を実行する。Edit-Deleteメニュー機能と同じ働きをする。 詳しい情報については、当該セクションを参照。
Ctrl+Homeキー	表の最初の行にフォーカスを移動し、これを選択する。
Ctrl+Endキー	表の最後の行にフォーカスを移動し、これを選択する。
Shift+ 上向き矢印キー	選択領域を一つ上の行まで拡大する。
Shift+ 下向き矢印キー	選択領域を一つ下の行まで拡大する。
Shift+ Page Upキー	選択領域を前のページまで拡大する。
Shift+ Page Downキー	選択領域を次のページまで拡大する。
Shift+ マウス・クリック	マウスをクリックした時点で既存の選択をすべて解除し、現在のフォーカスポイントとマウスのポインターがある行の間の行範囲を選択する。
Ctrl+ マウス・クリック	マウス・ポインターが位置する行の選択状態を、他の行の選択状態に影響を与えることなく、トグルで切り替える。
マウスのダブルクリック	選択されたユニットのデフォルト動作を起動する。

付録 C: TCPポート

次の表は、Remote Console Switchによって実行される機能と、使用されるポートの一覧です。

表 C.1: 使用されるポート

ポート	機能
TCP 80/443	デフォルトのHTTP/HTTPSです。
TCP 2068	ビデオ・ビューア・ビデオ、キーボード、マウス、ユーザー認証、バーチャル・メディアに使用されます。
TCP/UDP 3211	管理とインストール／検出に使用されます。



注: TCP/IPポートは固定されており、変更できません。



注: ポート2068と3211のデータはすべて、Secure Socket Layer(SSL)プロトコルを使用して暗号化されています。



注: 1081ADと2161ADスイッチの場合は、TCP 2068およびTCP/UDP 3211ポートをサポートするためにRAKが必要です。

付録 D: テクニカル・サポート

Dell製品のインストールや操作について問題や疑問点が生じた場合には当社のテクニカル・サポートまでご連絡ください。担当スタッフがお手伝いいたします。万一問題が生じた場合は、より良いサービスをお受けいただけるよう、次の手順に従ってください。

問題を解決するには:

- 1 問題の該当箇所をマニュアルで調べ、記載されている手順に従って解決できるかどうかを試してください。
- 2 弊社のWebサイト(dell.com/support)にある「Knowledge Base(ノレッジ・ベース) 」のデータベースからご検索いただくか、あるいは「Online Service Request(オンライン・サービス・リクエスト) 」をご利用ください。
- 3 最寄りのDellテクニカル・サポートまでお電話にてご連絡ください。

